古墳出現期における地域間関係
—「白江式」の検討を中心として—

森本　幹彦

要旨　小稿は，北陸西部地域における古墳時代初頭の土器様式である「白江式」の検討を中心として，古墳出現期における地域間関係や新しい文化に対する地域の対応を解明することを目的としている。

従来，北陸地域における古墳時代初頭段階における土器や墓制の変遷には東海地域の影響や政治的関係をみる考えが多かったが，土器を中心とした比較対照から近江地域との関係性の強さを示した。さらに北陸西部が近江地域（特に琵琶湖北～北西部地域）との関係性を強めた背景には，北陸西部社会のベクトルの先が大和地域を向くようになったためと考えられる。近畿～北陸西部地域では，大和地域を志向するリレー式の地域間関係が古墳時代初頭に成立し，以後段階的に土器様式の地域差が解消されていくと考えられるのである。

このような地域間関係の中，北陸西部社会は新来の文化に対してどのように向き合っていたのか。北陸西部の古墳時代初頭期の代表的集落について土器相から類型化を試みた結果，古墳時代「新出集落」を中心として新出形式（“近江系”土器主体）への転換が進められており，さらに煮沸形式のあり方などからみて，新出形式の受容に際しては一定の選択性が働いていることが分かった。土器における新出形式への転換の中心となっている古墳時代初頭新出集落は，墓制の変化過程も考え合わせると，在地集団主導の下，再編成された集落と考えられ，それが各小地域において新来文化受容の拠点的な役割を果たしたと考えられる。

はじめに

古墳出現期における新しい社会関係の急激な進行は，墓制や集落構造の変革のみならず，各地の土器様式にも大きな影響を与えている。本稿では当該期の考古資料の中で最も普遍的な存在であり，時間的指標としても有効である土器を主な分析対象とし，古墳出現期の諸問題について考えていきたい。

古墳時代開始期の土器は，広域にわたる「土器交流」が汎列島的な規模の現象としてみられることを特徴としている。そして，外部地域に系譜を求めることができる土器（以下，搬入品・在地模倣品を問わず「外来系」土器と呼ぶことにする）の参入によって在地の土器様式が大きく変化する地域が少なくない。西日本地域における布留式系甕などの「畿内系」土器の「波及」や東日本地域における「東海系」土器の「波及」などは，それぞれの地域勢力の進出の反映と理解されることが多く，各地の古墳時代開始期における社会構造を解明する指標の一つとして多くの研究がなされてきた（寺沢 1987，赤塚 1990ほか）。本稿で主な対象地域としている北陸西部地域は「東海系」土器の「波及」と「畿内系」土器の「波及」を段階的に捉えることができ，この問題について考える格好の地域である。北陸西部地域の土器の変化は—弥生時代後期の発展的土器様式で在地色の強い

段階（月影式・弥生時代終末期）→「東海系」土器などの波及によって大きく土器様式が変化する段階（白江式・古墳時代初頭）→布留式系甕などの「畿内系」土器の波及などによって月影式の土器がほとんど払拭される段階（古府クルビ式・古墳時代前期前半）→各形式がほぼ「畿内系」土器に統一される段階（高畠式・古墳時代前期後半）―という流れが大方の理解となっている（田嶋 1986，安 1994，堀 2002ほか）。本稿では，いままであまりなされてこなかった近江地域との比較対照を通して上記のような理解を検討するとともに，「外来系」土器受容のあり方から古墳時代開始期の地域間関係について追求していきたい。

＊用語について：　土器の形式名については本来の用途がはっきりしないものが多いため壷形土器，器台形土器と～形土器を付すことが望ましいが，やや煩雑になるため本稿ではこの～形土器を省略して，壷，器台というように呼称している。

古墳出土土器については，古墳築造過程の儀礼や埋葬儀礼に関わる土器のみが有意なものであり，これについて「供献土器」の用語が用いられることが多い。しかし，それら土器は「供献」されたというよりは，儀礼に用いられた土器が遺棄されたと考えられる場合の方が多いので，ここでは古川氏の用語に従い「祭式土器」（古川 2003）と呼びたい。古墳の「祭式土器」，古墳の「土器祭式」というように用いることとする。

Ⅰ．北陸西部における弥生時代終末期～古墳時代前期前半の土器様相

本稿で考察する北陸西部とは主に福井県嶺北地域～石川県金沢平野までの地域である。北陸西部内の小地域区分については高橋 1995や安 1997等の地理区分に従う[1)]。福井県奥越盆地地域や嶺南地域（敦賀市と若狭）は他地域との交通の要衝でもあり重要な地域であるが，調査数等の問題で当該期の資料がほとんど明らかになっていないため，今回は分析の対象外とせざるを得なかった。

Ⅰ－1．これまでの編年的研究の流れ

本稿で対象とする土器の編年研究の流れは以下の通りである。

谷内尾氏は80年代以前の研究史を整理し，法仏遺跡出土土器の分類（A，B，C群）とその位置付けによって北加賀における弥生時代後期～古墳時代前期の編年案を提示し（谷内尾 1983）その後の編年研究の基礎となる業績を残した。

田嶋氏は漆町遺跡出土土器の検討を中心に体系的な編年案を提示した（田嶋 1986）。土器組成の変化を重視した編年となっており土器様式変化の概念，解釈に重点が置かれている。月影式は法仏式を殆ど踏襲し，各器種が極限まで定型化（形式化）しているとし，外来系土器を基本的に含まず極めて閉鎖的な様式と解釈した。そして，東海系を中心とする外来系土器が北陸の土器様式に大きな影響を与え始めるものの，布留式系土器の影響が未波及の段階として，新たに白江式（漆５，６群）を提唱した。これはほぼ，谷内尾氏の月影Ⅱ式を細分したことになる。次の漆７群段階は月影系土器群が払拭され布留式系甕が突然ともいえる状況で甕の主体になり山陰系甕も増加するなどの

点を特徴として挙げ，これが谷内尾氏の古府クルビ式に近いものとしている。漆8群は資料的な不安定さを認めながらも，布留式系甕の定型化・小型三点セットの確立する時期としている。田嶋氏の編年では，月影系土器の残存と外来系土器による変質・解体期としての白江式の設定が注目される。

漆町編年は北陸西部を代表する土器編年となっているが，漆5～8群の基準資料は一括性に問題のあることが指摘されており（南 1987・堀 2002・安 2003ａ），高坏や器台などの型式変化の検討から具体的な時間軸を設定する試みもなされている（南 1987・1995，高橋 2000，堀 2002・2003ａ）。

堀氏は弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年において指標となる甕・高坏・器台などを選択し，時間による型式変化を念頭においた細分類を行った。そしてそれら各細分類された形式について，出土遺構や層位の検討から編年の縦軸を，一括資料による共伴関係から編年の横軸を検証した。そしてそれらを総合して弥生時代後期～古墳時代前期を18の様相に設定し，様式や画期の検討を加えている。各段階の土器組成変化の大筋は漆町編年と似るところが多い，漆町編年で提示された基準資料の中には前後する時期の混在が認められることを明らかにしており，また画期の設定においても田嶋氏とは違いがみられる。

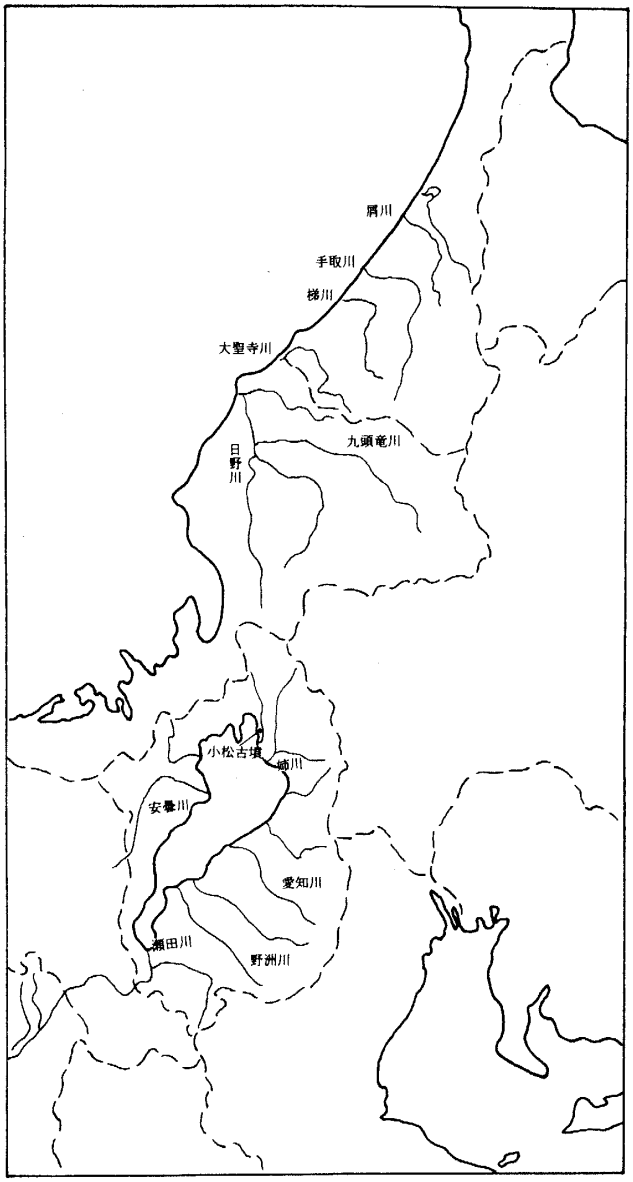

図１　北陸西部・近江地域とその周辺

Ⅰ－２．本稿の時期区分と各段階の土器様相

本稿の時期区分は，堀氏の提示した時間軸にほぼ沿う形で以下のように設定するが，土器の組成からみた様式の画期については，田嶋氏の考えに近い立場をとる[2)]。大和地域（寺沢 1986）や尾張地域（赤塚 1990・1997）との併行関係についても堀氏の成果によっている。

0期：堀編年の様相7～10。「月影式」。概ね，近畿の庄内式前半，東海の廻間Ⅰ式に併行。弥生時代終末期

Ⅰ期：堀編年の様相11～12。「白江式」。概ね近畿の庄内式後半，東海の廻間Ⅱ－1～Ⅱ－3式に併行。古墳時代初頭。

Ⅱ期：堀編年の様相13～15。「古府クルビ式」。概ね近畿の布留式古段階，東海の廻間Ⅱ－4式～Ⅲ式に併行。古墳時代前期前半

以上のことをふまえて今回分析対象とする時期の北陸西部における集落遺跡出土土器の様相について，組成の変化を中心にその流れをみていく（図2・3）。

0期：　月影式新段階（堀氏様相9・10）のものを中心に図示している（図2）。月影式は発達した有段口縁を特徴とする土器群が各形式の主体となっている。弥生時代後期後半の法仏式とは連続的な変化をみせている。甕は有段口縁で口縁部外面に擬凹線文が施されたものが多く，法量分化がみられる（1・2）。図示していないが2より小型の形式も存在する。口縁部外面が無紋のものもみられるが，有文のものに比べ口縁部の作りが甘く省略的な形式と考えられる。胴部外面ハケメ調整・内面ケズリ調整を主体とする。月影式新段階のものは頸部内面にハケメ調整の施された面が形成されたものが多く，底部は自立不可能な程小さい平底である。ほかに「能登型」甕[3]などと呼ばれる“く”の字口縁甕が少量みられる。

壷のバリエーションは実に豊富である。単純口縁のもの（6～7）は少なく，殆どが有段口縁の形式である。口縁部の相対的な長さ，胴部の横方向への張り出し，法量，脚台の有無などの組み合わせで様々な形式がみられる。頸部が一定の長さを有するものは大・中型品に限られる。相対的に長く直立気味の口縁部をもつ形式は頸部がほとんどなく横に大きく張り出す胴部と組み合わさる傾向にある（8～10）。（8・10～14）のような法量の壷・鉢は外面全体と口縁部内面が丁寧に磨かれ，赤彩された精製品であるものが多い。（6～7）のような形式と（3～5）のような形式では，甕と同じ調整またはミガキ調整が施されても部分的にとどまるものが多く，ススなどの付着がみられるものが少なくない。口縁部外面は擬凹線文や無紋のほか，（3）のような形式では円形，渦巻き形などの貼付文が施されるものがある。(17) は有孔鉢と呼ばれる丸底気味底部に焼成前穿孔をもつ形式である。内外面ハケメやナデ・ケズリ調整のものが多い非精製品である。(15・16) は身が椀形の鉢で丁寧に磨き調整された精製品であるものが多い。

高坏（21～23）は有段口縁状の形式（21）が主体である。いずれの形式も丁寧にミガキ調整される精製品で，赤彩されたものも少なくない。

器台は有段口縁で口縁部が外反して長く伸び，脚部に段をもつ（18）と，同じく有段口縁であるが口縁部が短く脚部に段をもたない（19）があり，北陸西部では前者が多い。他に（20）のような「装飾器台」と呼ばれる受部が2段になっており，涙形などの透孔が受部に施された形式が各遺跡少数出土する。脚柱部以下は（18）とほぼ共通するが，受部は上記特徴のほかに下段受部口縁帯が

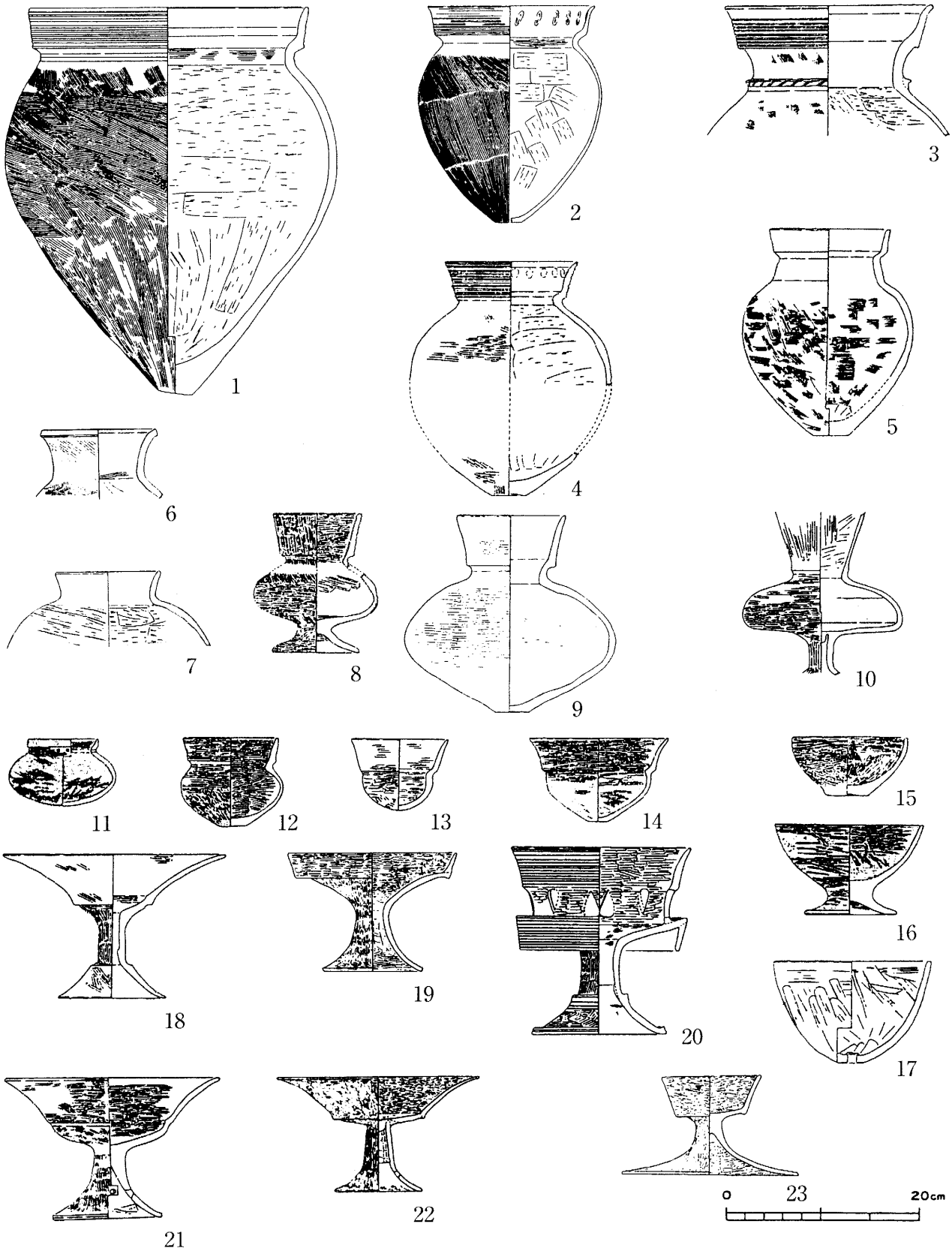

図2　月影式の土器

垂下口縁になるといった特徴がみられる。(18・19) の口縁部外面は基本的に無紋化しているが，装飾器台では擬凹線文等の文様が施されたものが一定量みられる。

Ⅰ期： いわゆる外来系土器[4]の波及・受容によって土器様式が大きく変化し始める段階である（図3）。この段階から北陸西部の土器様式の中に定着するようになる“く”の字状口縁である甕A，“く”の字状口頸部をもつ壷A，複合口縁・二重口縁を有し文様加飾が施されることの多い壷B～E，精製直口壷の壷G，有稜・内湾坏部で“ハ”の字状脚の高坏A（中型高坏）・C（小型高坏），小型器台の器台A，などの形式は月影式系の土器に系譜を求めることができないものが多い。これらの内，加飾壷，高坏，器台などは従来東海系とされてきたものが多いが，甕Aの普及などを考慮すれば，近江地域との関係が強い形式群として捉えなおすべきである。ほかに北陸の土器交流を分析する上で取り上げられることの多い形式として甕E（受口状口縁甕），甕F（S字状口縁台付甕），甕G（台付“く”の字状口縁甕）があるが，基本的に客体的な存在であり，北陸の土器様式への影響はほとんどない。前段階からの月影式系土器は，各形式が一定量残存しているが有段口縁の不明瞭化など，退化的な変化がゆるやかにすすんでいる。

Ⅱ期： 上記のⅠ期に出現・普及する各形式と，甕B（いわゆる布留式系甕）[5]・甕C（いわゆる山陰系甕）が主要な形式となる。月影式系の土器は甕や鉢を除くとほとんどみられない。甕B・CはⅠ期にごく少数が北陸へ波及している可能性は否定できないが，この段階で定量存在するようになる（註2）。その他に山陰系土器と考えられる壷Fや器台Cなどが客体的に存在している。

いわゆる布留式系小型丸底精製土器の小型丸底壷・小型丸底鉢などは，この時期の新段階には出揃い定着するとされるが（田嶋 1986・堀 2002など），北陸においては小型器台に比してもごく少数の存在でしかなく（高橋 1995），遺跡により出土形式のバラツキがみられ，定着している形式とは言い難い。

この段階における布留式系土器の受容のあり方は，概ね近江地域の様相と連動しており，Ⅰ期の交流関係を基礎とした受容であったと考える。

Ⅰ－3．古墳時代初頭（白江式）新出形式について

以上のように北陸西部地域では，Ⅰ期段階から様々な外来系土器が認められるようになるが，その中でもⅠ期段階から北陸西部の多くの遺跡によって定着的なあり方をみせ，北陸西部の土器様式に大きな影響を与えたと考えられる甕A，壷A・G，高坏A・C，器台Aについてもう少し詳しくみていこう。壷B～Eについては，古墳の祭式土器の変化とも関連することであるので，章を改めて述べたい。遺跡ごとのあり方の差異についても後で述べることとする。

甕A（図4）： “く”の字状口縁の甕である。口縁部の形状と調整手法の組み合わせが多様であるため，細かく分ければキリがないが，全形の分かる資料からみて大きくは次のような2タイプがあり，両者が折衷したようなものが一定量存在すると考える。

（1～4）のように口縁部が立ち気味で長胴であるもの（A1）と（5～9）などのように口縁

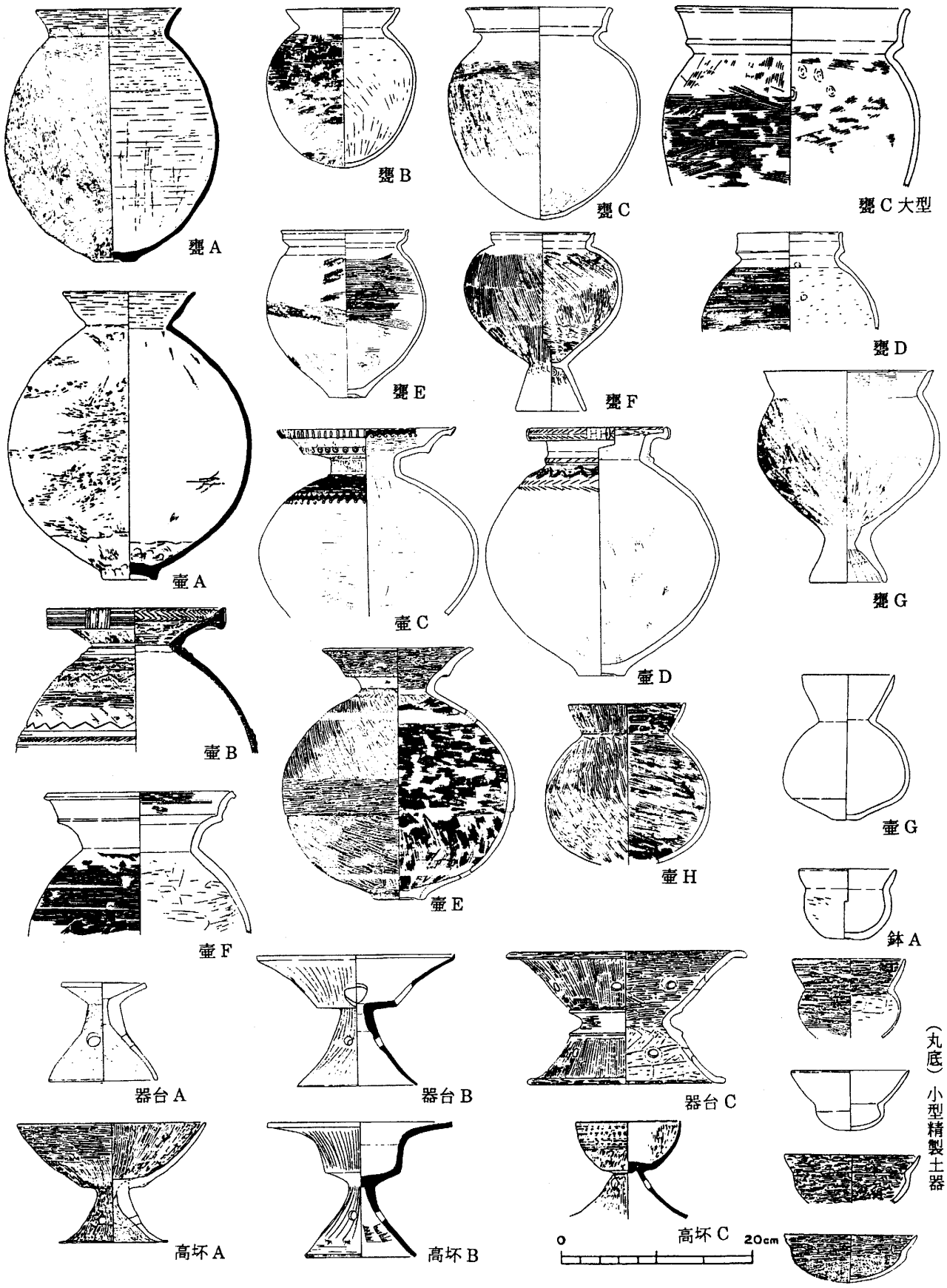

図3　古墳時代Ⅰ・Ⅱ期新出形式

部の屈曲が比較的強く，やや球胴気味のものである（A 2）。伴に底部形態は面積の広い平底のものや輪台状のものが多い。器壁は月影式系有段口縁甕に比べて厚手で，胴部下半部に成形の単位を観察できるものがある。10のような球胴化が著しく丸底に近い底部形態のもの（自立不可能な小さい平底または窪み底のものを含む）（A 3）は福井市今市遺跡SD05でまとまって出土しているが全体としては少ない。

外面の調整手法はほぼ全てのものにハケメ調整が観察されるが4などのようにハケメ調整後部分的にナデやケズリ調整を施すものがみられる。（8・9）のようにハケメ調整前のタタキ調整が観察できるものもある。外面にタタキ調整を残すものは各遺跡出土の甕Aの中でも少数にとどまるが，加賀市永町ガマノマガリ遺跡（Ⅱ期が主体）出土甕Aのほとんどは胴部外面にタタキ調整の痕跡を残している。

内面調整はハケメ調整の後に，ナデまたはケズリ状のナデ（月影式系有段口縁甕のケズリに比べるとナデに近い）調整が施されるものが多いが，そのナデ調整は胴部内面全面には及ばず部分的にとどまるものが多い。口頸部は最終的に内外面ヨコナデ調整を施すものが多いが，不徹底であるため，その前段階のハケメ調整や成形時の圧痕を残すものが多い。また，このヨコナデ調整が省略されているものもみられる。

このようなことから，以下のような手順で甕Aの調整が進行したと考えられる。

外面調整：水平～右上がりの粗いタタキ→ハケメ→部分的にナデ・ケズリ調整

内面調整：ハケメ→ナデ・ケズリ調整

口頸部内外面調整：ヨコナデ調整

甕A全ての個体でタタキ調整が行われたのかどうかは定かではないが，上記行程の内省略されるものも多いため多様な外観を呈しているようにみえるのである。また甕Aは壷Aなどと成形方法・調整手法に類似点があり，やや厚手の据わりの良い形態の土器を作る製作手法と言える。

これらの甕Aに共伴する月影式系有段口縁甕（11など）は月影式期からの型式変化が進み胴部球胴化と底部の小型化が進んでおり，ほとんど自立不可能な形式となっている。有段口縁甕のメルクマールである有段口縁は甕Aの影響であろうか，内面を中心に不明瞭化する傾向にある。観察できる調整手法等は月影式期と共通して外面ハケメ調整，内面ケズリ調整で，口頸部内外面を丁寧にヨコナデ調整する。口縁部外面には擬凹線文と呼ばれる平行線文が施されるものがある。

上にみた甕Aは，この月影式系有段口縁甕とは形態・製作手法・使用法[6]等，違いが大きいことが分かる。月影式期の甕はほぼ有段口縁甕のみで占められているため，Ⅰ期になって甕Aのような煮沸形式が一定量占めるようになるのは調理法など生活形態の変化を伴った大きな変化があった可能性が高い。

壷A（図6）：　壷Aは口頸部が“く”の字状に開く広口壺で，口縁端部は丸くおさめるか，小さな面を持つ程度である。月影式期にも有段口縁以外の壷は少量みられるが，口頸部が直立気味の短頸壷や頸部のすぼまりが不明瞭で，頸部から胴部上半にかけてなめらかな輪郭線を描く形式が多く，

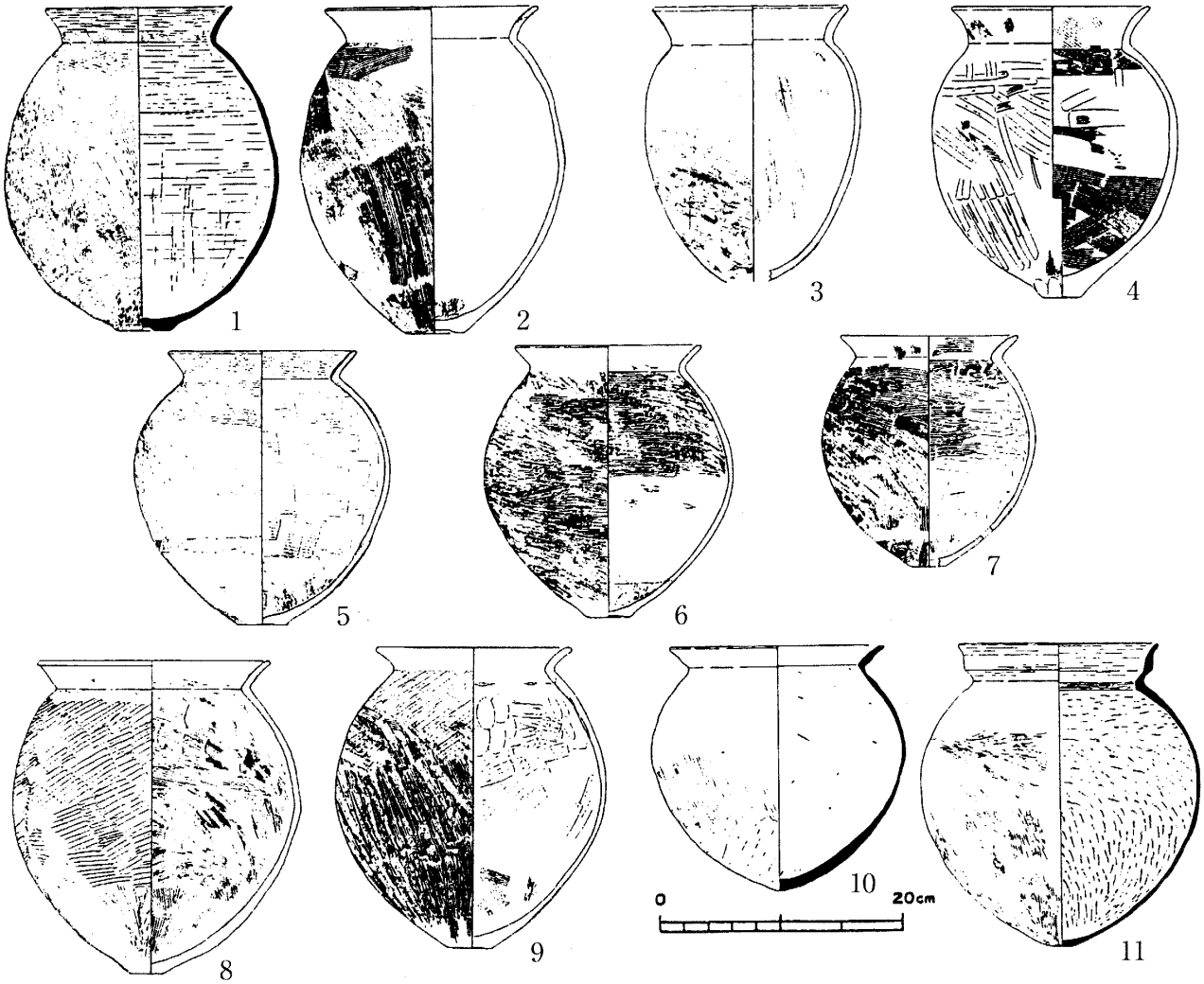

図4　甕A（11を除く）

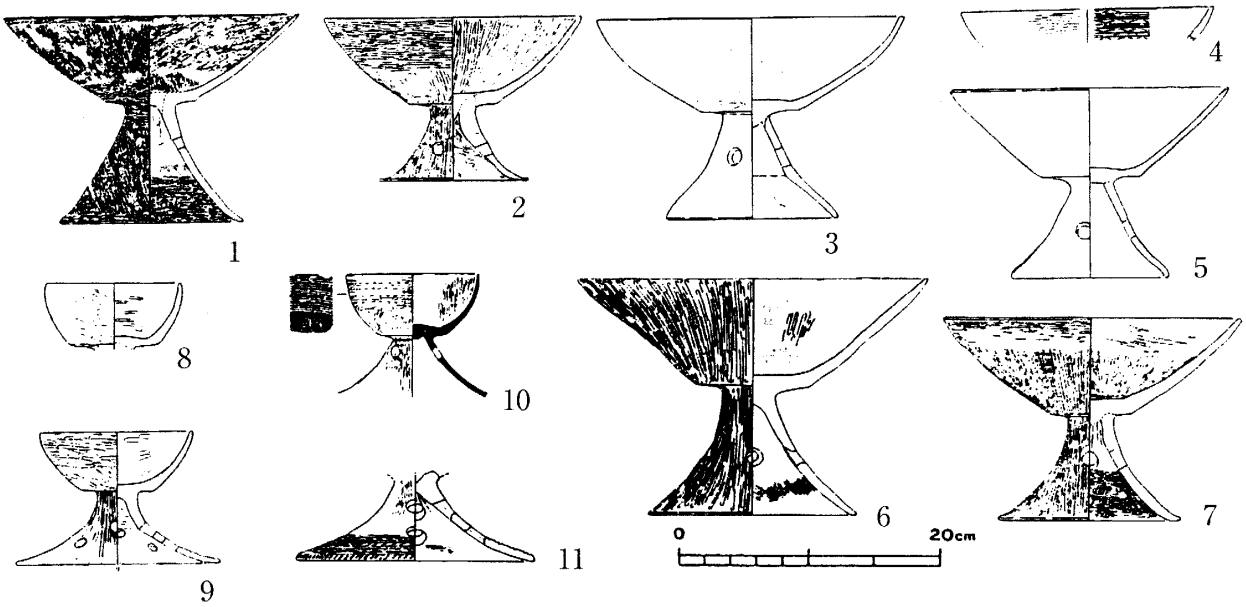

図5　高坏A・C

それらと壷Aは異なる系譜と考える。また壷Aのような頸部形状は月影式の有段口縁壷にもみられない。壷Aの底部は円盤突出状や輪台状となっているものが多く，据え置いたとときの安定性を志向した形となっている。胴部のプロポーションは球胴気味で相対的に長胴気味のものと球形に近いものとがみられるが線引きは難しい。口頸部は直線的～やや外反気味に開き出しており，その開き出す角度にはやや幅がみられる。調整手法はある段階まで甕Aと共通したものが多いが，甕Aと違い最終的に胴部外面が一部または全面的にミガキ調整されたものが多い。（4）の胴部外面調整はタタキ→ハケメ→一部ミガキ・口頸部のヨコナデという手順になっている。また壷Aは，甕程ではないがススなど火にかけられた痕跡を残すものが多く，煮沸容器として使用されることも多かったと考えられる。

壷Aは（1～4）のようなものを基本形態とする（A1）が，バリエーションとして（5・6）のように頸部に刻入突帯を有し口縁部外面を受口状などにして小さな面を形成し，そこに短い棒状浮文や列点などを施すもの（A2）や，（7）のように肩部に壷BやCなどと類似する文様が施されたものが存在する。（8）は月影式系有段口縁と壷Aの折衷形式であるが，口縁部内面の段はほとんど形骸化している。このような折衷形式は図示した光源寺遺跡を好例とするが他には西谷6号住居出土壷にその可能性が指摘できるくらいにすぎない。

壷G（図7）：　直口口縁もつやや小振りの精製壷である。外面全面と口頸部内面が丁寧に磨かれており，赤彩痕跡を残すものがみられる。（1・2・5）のように胴部の横方向への張り出しが強い形式（G1），（3）のような球形胴の形式（G2），（6・7）のように胴部最大径部位が下方に位置する低重心扁球形胴の形式（G3）がある。さらに口頸部の高さによって器高の1/2近くのもの（a類）と1/3程度のもの（b類）に分けうるが全形の分かる資料が少ないので各形式との相関性は不明である。口頸部の形状には内湾気味のものと直線的なものがみられる。（5）の口頸部のように下部は内湾し，上部が外反するもの（c類）もみられるが少ない。底部形態については自立するには不安定な小平底のものが多いが，（6）のように底部が広い据わりのよい形式もみられる。また，無紋のものが多いが，口縁部付近外面や肩部付近外面に櫛描文等の文様が施されたものもみられる。他の形式の文様と共通しており，壷G特有の文様はみられない。

高坏A（図5　1～7）：　ほぼ水平な坏底部から内湾気味に立ち上がる坏部形状とハの字状の脚部を特徴とする形式である。脚部形態は（1・2・6・7）のように，外湾気味に末広がりとなるもの（A1）と，（3・5）のように脚下部がやや内湾気味になるもの（A2）とが認められる。両者の形式はⅡ期まで併存する。（2）のように脚部が相対的に短い形式もみられるがここでは特に分類をしない。

坏部の最終的なミガキ調整は縦方向が主体で全面縦方向のものと，口縁部付近が横方向で以下が縦方向のものとがみられる。坏部内外面を横方向主体にミガキ調整するものはⅠ期段階では少数で，Ⅱ期以降増加している。

一方，月影式系高坏では月影式期から坏部の調整は横方向が主体となっており，内外面全面横ミ

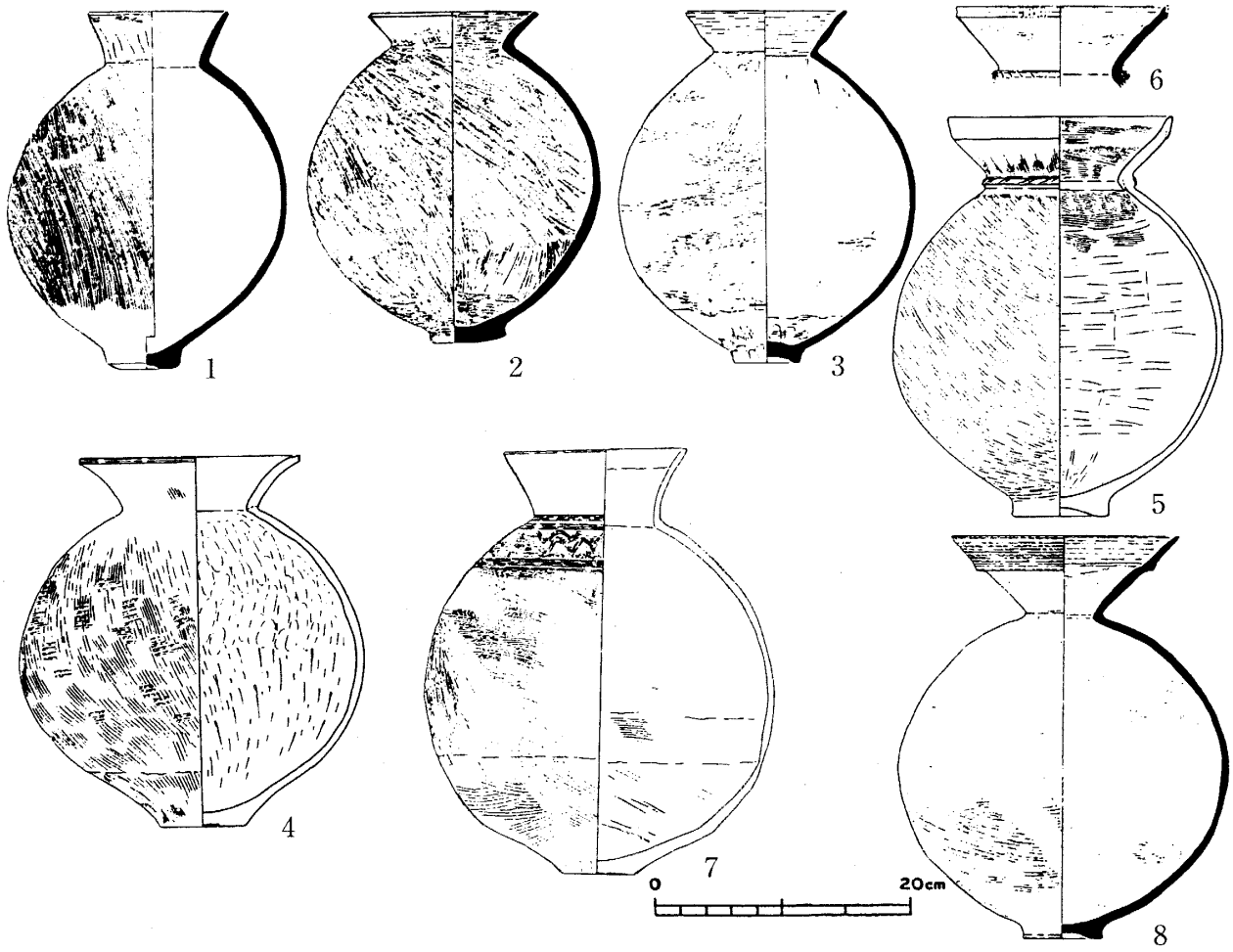

図6　壷A（8を除く）

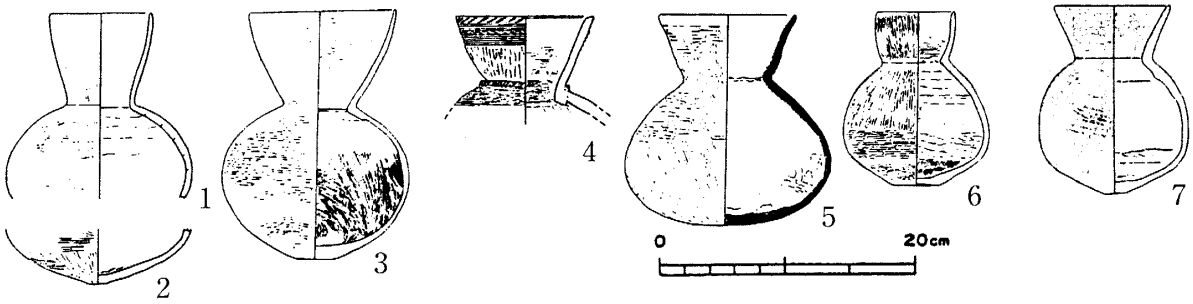

図7　壷G

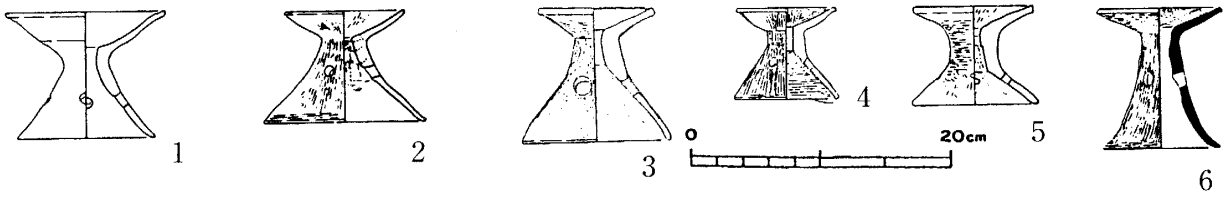

図8　器台A

ガキ調整であるものと口縁部外面が左上がりのミガキ調整になっているものが多い。

高坏C（図5　8～11）：　Ⅰ期以降みられる小型高坏の形式である。全形が分かる資料に乏しい。脚部は“ハ”の字脚で低く大きく開き出すものが多い。内湾気味の坏部形状や文様が施されたものがみられる[7]点などに高坏Aとの親縁性がみられるが，（図2－23）のような月影式期の小型高坏とも形状に類似性がみられる[8]。月影式の小型高坏の坏部は坏底部から屈曲点を経て口縁部に向けやや外反気味に立ち上がり，屈曲点の下端が下方へ突出するものが少なくない。坏部は内外面横ミガキ調整を主体としている。坏部が段をなして外反気味に立ち上がる形状は月影式の高坏や器台などの形式に通有のものであるが，鉛直方向に近い立ち上がり角度と，大きく開き出す脚部形態がこの形式の特徴である。月影式期においてこのような小型高坏の出現頻度は低く，またⅠ期まで残存しないようである。

器台A（図8）：　器高10cm前後の小型の器台で，受部底面～脚部にかけてが貫通している形式が主体となっている。外面と受け部内面にミガキ調整が施され赤彩されたものもみられる精製土器である。口縁部は図のように単純におさめるものが主体で，ハネ上げ口縁や有段口縁状のものが少数みられる。脚部形態は（1・2）のように受け部下端から“ハ”の字状に開き出すもの（A1），（3～5）のように受部下端から短い「筒状部」を経て脚部が開き出すもの（A2），（6）のように脚部が著しく細長いもの（A3）がある。A2の筒状部下の脚部は内湾気味に開き出すものが多い。

この器台Aとセットになる形式は，鉢Aなどの小形の形式であると前提的に理解されている。しかし出土量からみて鉢Aは器台Aに比べごく少数であること，鉢Aが基本的に非精製土器であることから疑問である。壷Gのような精製壷が，自立不安定な形状であるものが多いことや出土量などからみて，土器の中では器台Aとセットになる可能性が一番高いと考えているが，固有のセット関係をもたない可能性や木製等の器がセットになる可能性もある。

Ⅱ．近江地域の様相と北陸西部への影響

従来の北陸における研究では，Ⅰ期に相当する段階の土器様式の変化は東海地域に出自のある土器の影響が大きいと理解されてきたが，介在する近江地域の様相と対照させた研究はあまり行われてこなかった。地理的に注意はされてきたが，北陸においては受口状口縁甕や近江北東部の長浜地域に多い台付“く”の字状口縁甕が少数しかみられないことなどから，近江地域の影響はあまり評価されなかった。そして東海の影響を重くみる理由はⅠ期新出形式である有文加飾壷や高坏，小形器台などの形式が東海系と理解されてきたことによる。しかし近年，近江の研究者である植田文雄氏が，北陸にみられるこれら東海系土器とされるものや前方後方墳は近江地域に由来するものでないだろうかという指摘をしており（植田 2001・2002），橋本輝彦氏も同様の見解を述べられている（橋本 2004）。しかし植田氏の指摘は詳細な土器論によるものではなかった（土器については受口状口縁甕の他地域への分布・影響を論述したにとどまる）ためか，反響はほとんどみられなかった。古墳出現期前後段階の受口状口縁甕の分布域は確かに広範であるが，近江以外の地域では，ごく客

体的な存在にすぎないためであろう。また植田氏は過去に近江地域の土師器編年について論じており（植田 1994），近江地域においても東海系と理解されることの多い高坏や加飾壺を近江在地の形式とする考えを示している。そのことも上記指摘の背景にあったと考えられる。前方後方墳の系譜や出現背景については後章で検討することとする。

当該期の近江地域の高坏は坏部形状が東海地域と類似することは大方の指摘の通りであり（小竹森 1989，植田 1994，宮崎 1994ほか），廻間編年であきらかにされた東海地域の高坏の型式変化と連動している可能性が高い。今回は北陸との関係を問題としているので，この高坏等を手がかりとして，廻間編年や堀氏の北陸編年との併行関係を想定し，前述の０期，Ⅰ期，Ⅱ期という時期区分に対応させる形で近江地域の土器相をみていくことにしたい[9]。

Ⅱ－１．北陸西部地域への影響が大きい形式

近江在地形式の内，北陸への影響が大きいと考えられるものは甕Ａ，壺Ａ・Ｇ，高坏Ａ・Ｃ，器台Ａであり，壺Ｂ～Ｅも厳密な対応は難しいが近江地域の形式が北陸に影響していると考える。一方，近江在地形式の中でも，北陸への影響が少ないものとして，受口状口縁甕，台付甕，受口状口縁鉢，近畿庄内式系高坏などを挙げることができる。

甕Ａに類する形式（図９）：　甕Ａに類する“く”の字状口縁の甕は弥生時代後期（０期に先行する段階）からみられ０期段階以降，近江北部を中心に一定量占めており，いわゆる受口状口縁甕（図14－１～３）に対して客体的な存在とはいえない状況にある。０期のもの（１～５）は口縁部が立ち気味で長胴気味の体部形態のものが多く，Ａ１に類する形式が主体である。調整手法は外面ハケメ調整を主とし，内面はハケメ調整の後にナデ調整が施されるものが多いが部分的であるものが多く，口縁部や底部付近にはよくハケメが残存している。口縁部はヨコナデが省略または不徹底であるためハケメが残存するものが多い。胴部外面にタタキ調整の痕跡を残すものもみられる（５）。これらの甕は，後述の受口状口縁甕のうち近江北部に多いとされるタイプと体部において一定の類似性がみられる。

Ⅰ期になると口縁部の屈曲が強く球胴気味形態のＡ２に類する形式（８，９など）が加わる。これには庄内式系甕の影響が想定できるかもしれないが底部の尖底化・丸底化はあまり進んでいない。

鯖江市長泉寺遺跡では，本稿のⅠ期段階以降，甕Ａの形式が多くなることが明らかにされ，湖北地域の五村遺跡や柿田遺跡等の土器と対比されている（青木・赤澤 1994）。

この形式の甕は形態的特徴からみて，近畿地域のいわゆるＶ様式系甕と親縁関係にあると考えられる。ただしＶ様式系甕に比べると外面調整において全面にハケメ調整が施される傾向が強くなっている。近江地域において，この形式が０期段階から普及するようになったのは，近畿地域の中でも土器様式に近江系要素が強い山城地域との関係性が強いであろう。米田氏の指摘するＶ様式系甕の拡散（米田 1997）とは意味合いが異なるが，甕Ａに類する形式のあり方は，近畿地域の“く”の字状口縁甕と親縁関係にある形式が，段階的に近江地域や北陸西部地域の煮沸形式の一つとして

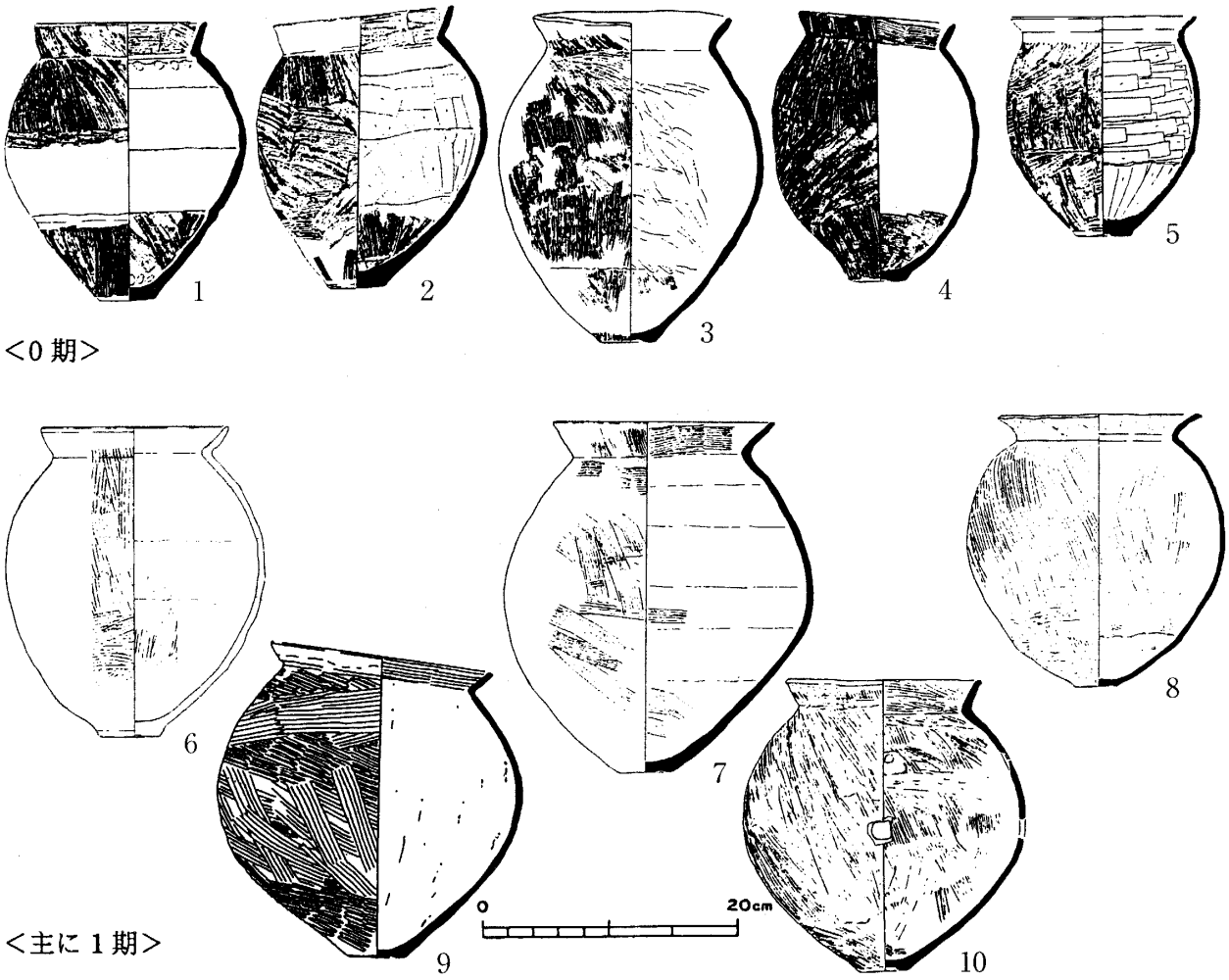

図9　甕Aに類する形式

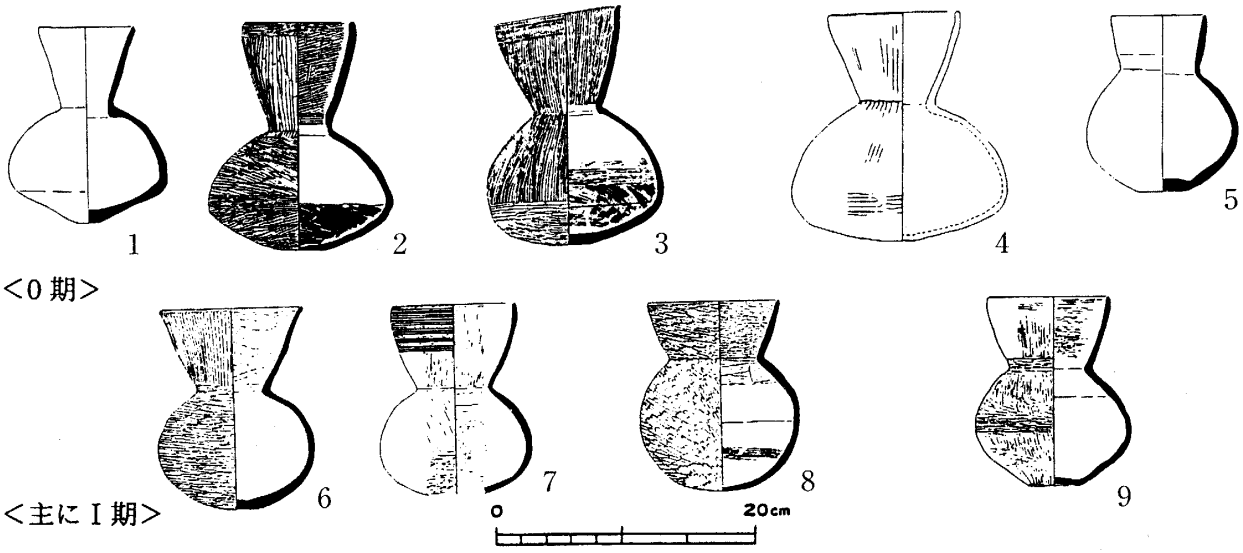

図10　壷Gに類する形式

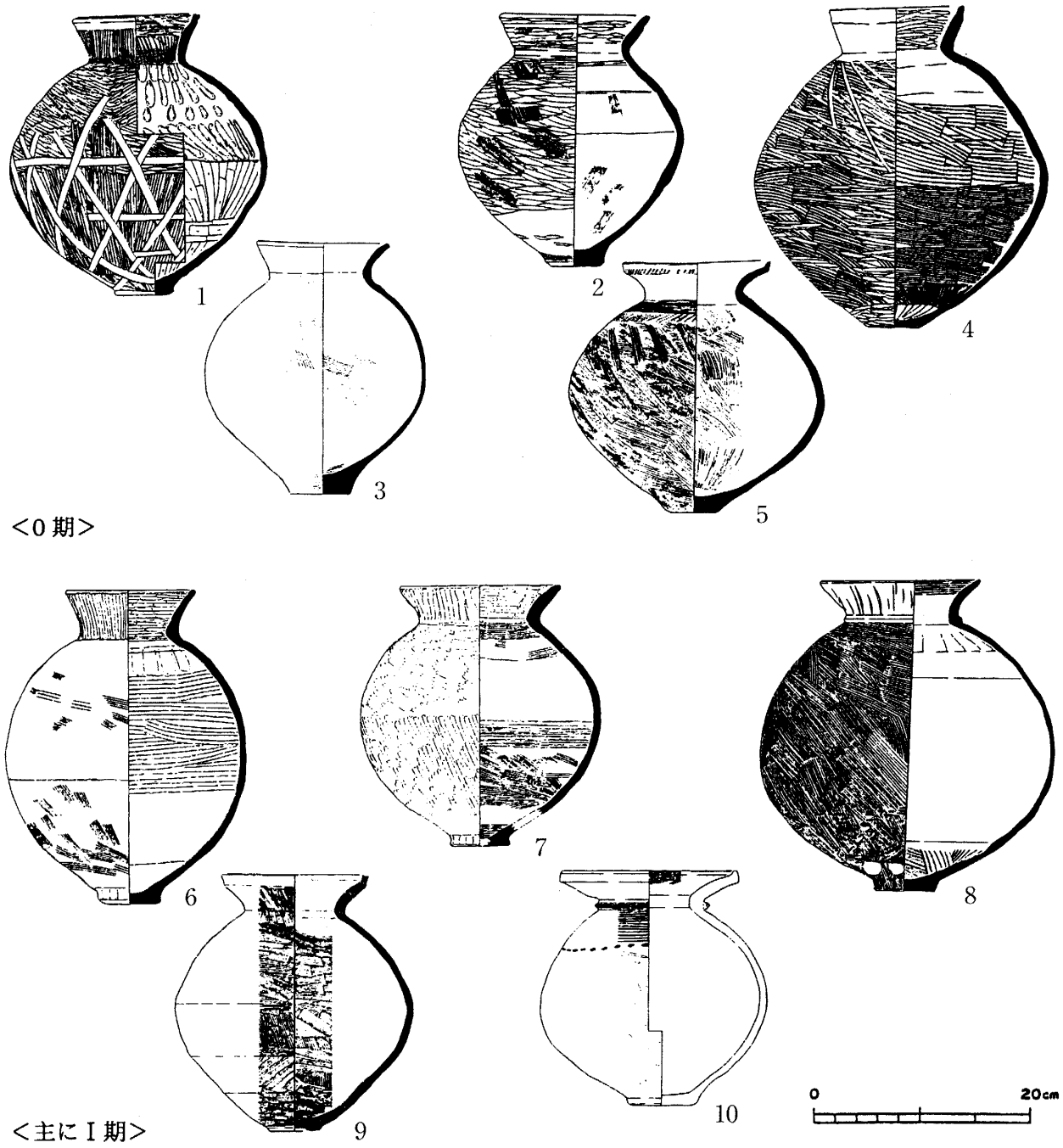

図11　壷Aに類する形式

浸透していく様を示していると捉えることもできる。

壷Aに類する形式（図11）：　壷Aに類する“く”の字状口頸部をもつ広口壷は弥生時代後期からみられ，0期段階では口頸部が直立気味の形式（1）とともに壷の主体的な形式となっている。口縁端部が丸くおさめられる形式（2・3）の他に，受口口縁的な手法によって口縁部外面に小さな面が形成されているもの（4・5）がみられる。後者は壷A2に通じる形式といえよう。文様が施されたものが少量存在するが，（5）のように受口状口縁甕・鉢と共通する近江地域的な文様構成

のほか，頸部直下～肩部外面付近に直線文と波状文を組み合わせた文様が施されるものも弥生時代後期から確認できる。調整手法については外面ハケメ調整やハケメ調整の後に粗いミガキ調整が施されるものがみられる。また煮沸に使用した痕跡を残すものが少なくない。

0期と1期で大きな変化はみられないが，壷全体の傾向として0期段階の方が胴部形態において横方向への張り出しが強い横長気味のプロポーションのものが多い傾向にある（宮崎 1994）。

壷Gに類する形式（図10）： 壷Gに類する精製直口壷は，0期段階においては，弥生時代後期後半からの細頸長頸精製壷の系列である（1）のような口頸部が直線的な形式のほかに，口頸部が内湾気味に伸びる形式がみられる。口縁部付近外面に擬凹線文等の文様が施されるもの（3）もみられる。全形の分かる資料は多くないが，0期の壷Gは胴部の横方向への張り出しが強く，下膨れした扁球形のプロポーションで頸の長い形式（G1aに類する形式）が多いようである。（5）のような球形に近い胴部形態で頸部が相対的に短い形式（G2b）はI期以降増加する形式である。I期になると，G2・3に類する形式が主体となり頸部の長いもの（a類），短いもの（b類）がみられる。底部形態については自立させるには不安定なものが多いが，広めの平底をもつ形式もみられる。

高坏Aに類する形式（図12 1～7，12～15）： 高坏Aに類する形式は0期段階から近江の高坏の主要形式となっている（1～7）。坏部の形状の型式変化は，廻間編年と対照させると，（1）のように坏下部（坏底部～坏部屈曲点までの部位）が傾斜し，坏下部の長さに対する坏上部（坏部の屈曲点から口縁部にかけて立ち上がる部位）の長さの比率が相対的に小さいものから（3）のように坏下部が水平で坏上部が相対的に長く，深くなるものへと漸移的に変化すると考えられる。坏下部が水平になるのは廻間編年ではI－4式の段階であり，0期のなかでもI期直前の段階である。この段階の型式は北陸I期古段階の高坏Aに比べ坏部が深く，坏下部の長さが相対的に長い。I期以降の型式変化は北陸などと共通すると考えられる。脚部はA1のような形態とA2のような形態が0期段階から併存しており低脚のものもみられる[10]。坏部内外面のミガキ調整は弥生時代後期の坏上部が外反する形式の高坏の段階から継続して縦方向が主となっており[11] 口縁部付近にのみ横ミガキが入るものもみられる。

高坏Aの坏部内面の文様装飾については，近江では0期新段階から平行沈線文を中心とした文様加飾がみられるようになる（6・7）。0期新段階のものは内面を一定幅で肥厚させて文様帯としたものが多く，この種の高坏は近江北東部地域（姉川以南～天野川以北地域）に集中的な分布がみられ(近江北東部では高坏の文様加飾の比率が高い)，美濃西部地域に特徴的な高坏(「西濃型高坏」：赤塚 1997）との類似性が指摘されている（松室 2002)。また（6？7）は脚部に比して坏部が極端に大きい形式であるが，これも近江北東部の0期新段階に多い形式である（無紋の高坏においても)。北陸においてI期に有文の高坏Aが客体的に存在することは述べたが，坏部内面の肥厚や，坏部が極端に大きい形式，といった近江北東部的な要素はみられない。

高坏Cに類する形式（図12 9～11，16～18）： 近江における0期段階の小型高坏形式はAの相

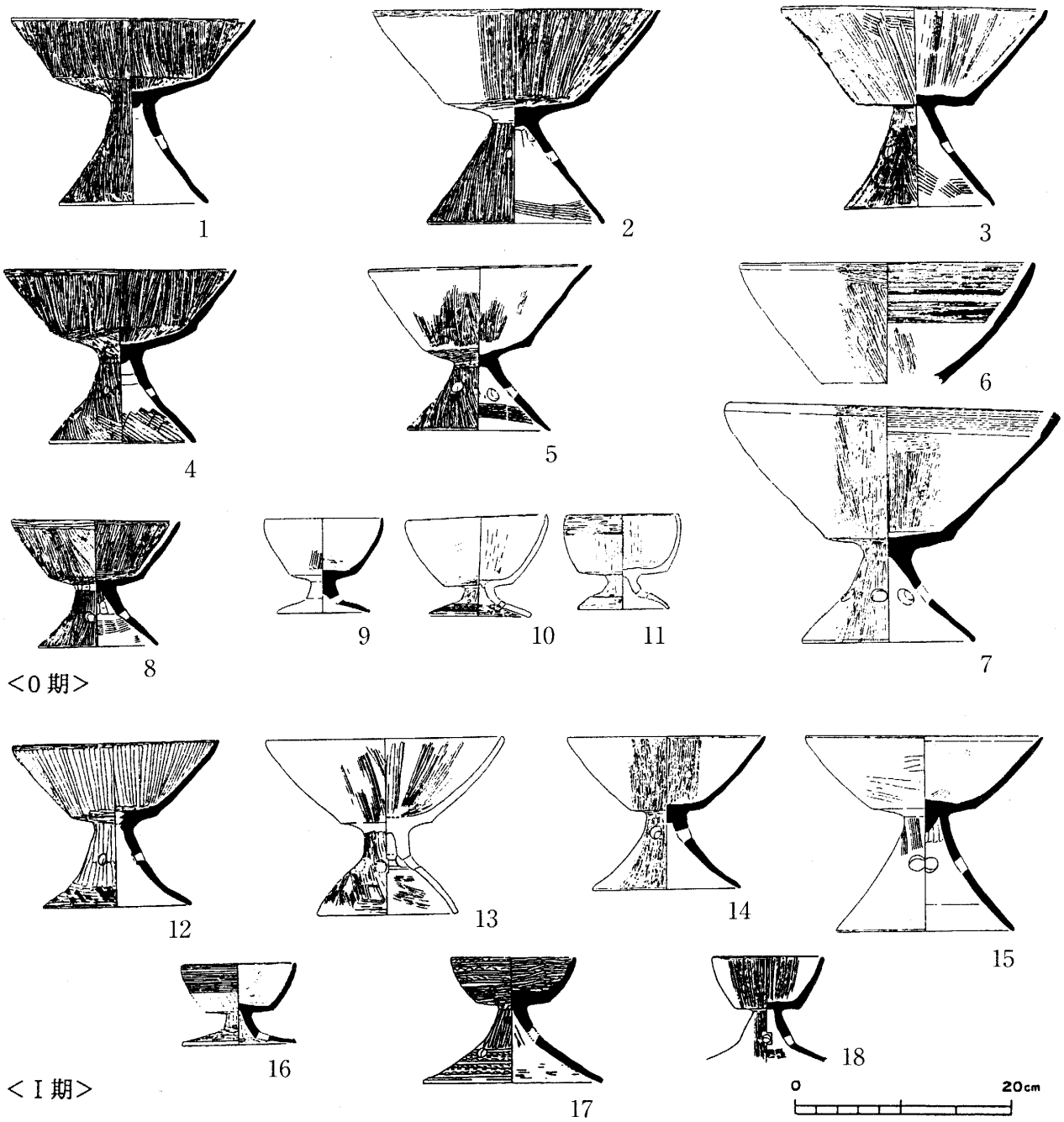

図12　高坏A・Cに類する形式

似形式（8）と高坏Cの系統と考えられる形式（9～11）とがある。後者では，口縁部付近外面と脚端部付近外面に文様が施されたものがみられる。この高坏Cの系統の形式はⅠ期の型式に比べ坏部が深く，脚部の開きが小さくなっている。原田氏は東海地域（尾張地域から琵琶湖北東部・東部地域までを含むとする）を中心に分布していた0期段階の小型高坏がⅠ期段階に高坏Cに類する形式に変遷し，「東日本型」の器種の一つになるという考えを示している（原田 1995b）。

しかし，小型高坏の脚部が大きく開き出す形態は，前述の通り0期段階の月影式の小型高坏にみ

られるものであり，北陸において先行的に存在しているといえる。また，寺沢薫氏や若林邦彦氏等の編年案（寺沢 1986，若林 2003）によれば，近畿地域の椀形坏部の小型高坏は0期段階から脚部の開きが大きい形式である可能性がある。Ⅰ期に北陸・近江にみられる高坏Cの形式は，近江的要素（坏部の形態と特定部位への施文）に近畿や北陸的要素（大きく開き出す脚部形態）が加わった形式である可能性を考えたい。

器台Aに類する形式（図13）：　近江における0期段階の器台は中型と小型のものがみられる。それぞれ口縁端部は単純な形態のものが多いが，垂下口縁で口縁部外面に擬凹線文が施されたものもみられる（9）。脚部の形態は受部下端からハの字状に開き出す形式（1～5）と，脚上部が柱状になり下部が“ハ”の字状やや内湾気味に開き出す形式（6・7）に大きく分けることができ，（8・9）のようにその中間形のようなものある。Ⅰ期になると小型のものが主体となるが（10～16），0期からⅠ期にかけて順次小型化していくのではない。0期段階では様々な法量のものが併存していたのがⅠ期段階で器高10cm前後の小型のものにほぼ一本化されるという様相がみてとれる。また脚部の長さに対する受け部の長さの比率は0期からⅠ期で小さくなる傾向にあり，器台の小型化には受部長の縮小も大きな要素となっていると考えることができる。形態面からみて近江0期段階の器台が器台A1やA2の祖型になり，Ⅰ期の器台は器台Aそのものと考えることができる。

Ⅱ－2．近江在地形式のうち北陸への影響が小さいもの

受口状口縁甕（図14　1～3）は弥生時代中期から古墳時代前期前半における近江地域型甕として有名な形式であるが，近江地域内において様々な地域色が存在することが明らかにされている（小竹森 1989，近藤 1992・1994ほか）。ここでは詳しくは述べないが（1）が近江南部に多いタイプで（2・3）が近江北部に多いタイプであるが，両タイプとも近江全域に分布する。近江の甕における受口状口縁甕の比率は近江南部ほど主体的な存在になっており，北部では遺跡や遺構ごとにややバラツキがみられるが，受口状口縁甕が必ずしも主体的な存在とはいえず，“く”の字状口縁甕など他形式の甕が占める比率が高くなる傾向にある（小竹森 1991，土井 1994）。

（図14　6～8）のような受口状口縁鉢や“く”の字状口縁であるが同様の胴部形態と調整手法が施されるこれらの形式は，鉢としての分類が通有であるが，小竹森氏の指摘の通り，煮沸に使用された痕跡を残すものが少なくない点と甕をそのまま押し潰して偏平にしたような形態である点から偏平甕形土器または鍋形土器といった呼称のほうがその性格を反映したものといえよう（小竹森 1988）。

近江地域の中では局所的に台付甕が煮沸形式の主体となる地域がある。近江北東部の姉川以南～天野川以北の地域は0～Ⅰ期にかけて台付甕の比率が非常に高いことが指摘されており，東海地域（特に近江北東部に隣接する美濃西部）との密接な関係が考えられている（小竹森 1991，古川 1991，宮崎 1994，松室 2002ほか）。この地域では長浜市鴨田遺跡M区SR－1出土土器（0～Ⅰ期）の甕がほぼ全て脚台をもつ形式であると考察されている（松室 1998）ように，濃尾地域と共

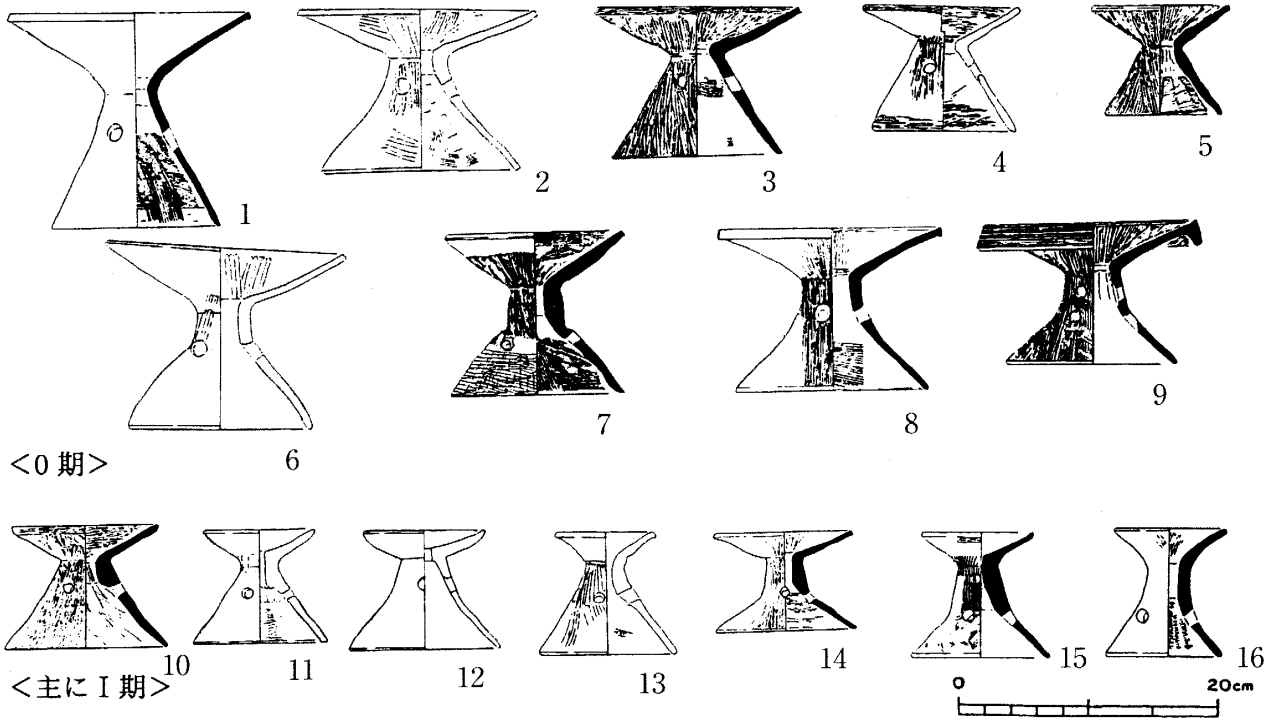

図13　器台Aに類する形式

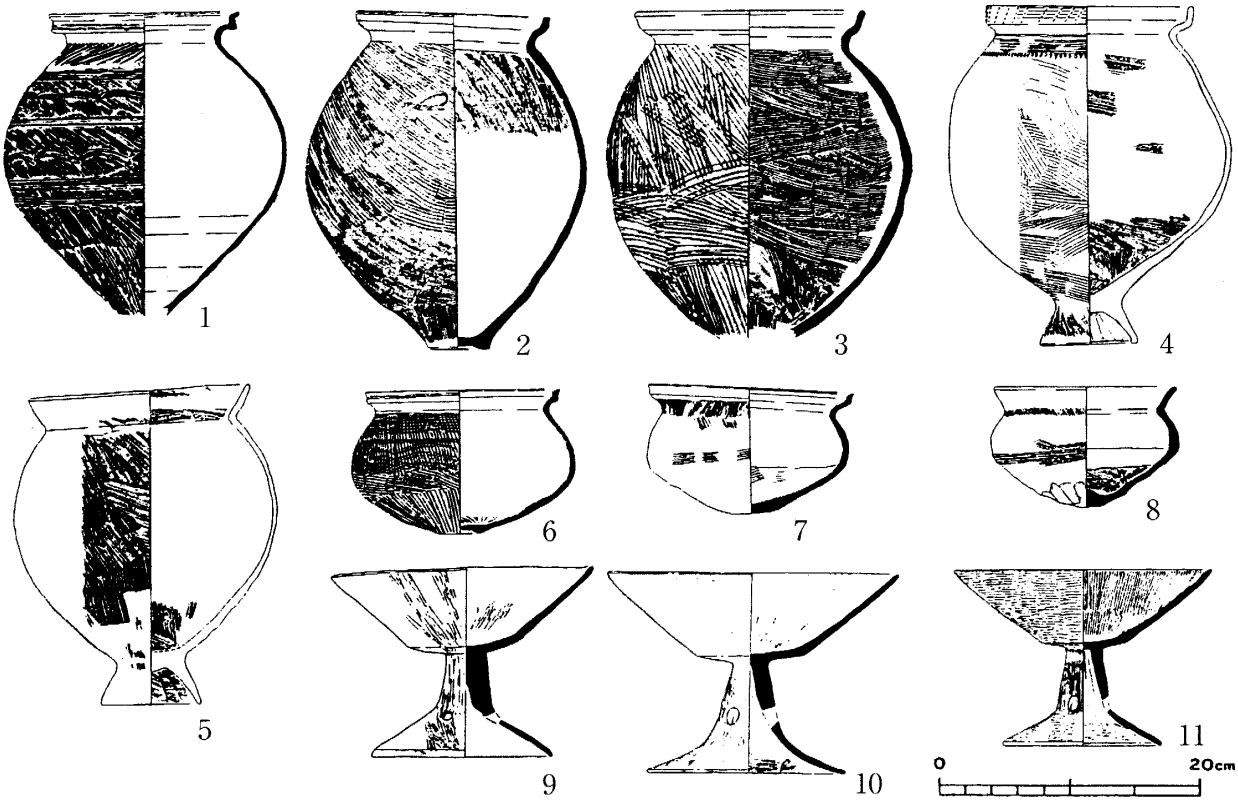

図14　北陸西部への影響が小さい形式

通する台付甕文化圏といえる様相をみせる。対照的に，この地域でも北端部に位置する柿田遺跡や姉川に北接する五村遺跡は，台付甕がほとんどなく平底甕が主体となっていることから，台付甕が主体となるエリアは近江地域の中でも極めて局所的なものであると考えられる。近江の台付甕は受口状口縁甕に脚台が付くもの（図14　4）と“く”の字状口縁甕に脚台が付くもの（図14　5）が主体となっている。いわゆるS字状口縁（台付）甕については近江各地域に散見されるが，影響は小さいと考えられている（小竹森 1991，近藤 2001）[12]。

（図14　9～11）のような，主として脚部形態において近畿地域の庄内式系の高坏と親縁性の強い高坏は，0期に相当する型式は確認できず，図示したものはⅠ期～Ⅱ期の型式である。近江南東部を中心に認められる。近江南部では，北部と異なりこの庄内式系に類する形式が高坏の主体になるという意見もある（小竹森 1988）が，Ⅱ期までは高坏Aが主体で，Ⅲ期以降布留式系高坏に転換するようであり（植田 1994，伴野 2003），北陸地域もそれに連動する様相を示す[13]。

以上のような形式は，「偏平甕」や庄内式系高坏に類する形式のように，当該期の北陸にはほとんど認められないものであったり，受口状口縁甕や台付甕のように，甕E・F・Gとして北陸各地域に分布するものの客体的な存在にとどまるものであったり，北陸西部の土器様式への影響は小さいといえよう[14]。

Ⅱ－3．小結

甕A，壷A・G，高坏A，器台Aに関しては近江在地の形式として0期段階から定着していた形式が，Ⅰ期段階に北陸西部において，形状・製作手法などトータルに受容されたと考えられる。これら地域での甕Aの普及に関しては，近畿地域でのV様式系甕の普及と関連していると考えられる。高坏Cに関しては祖型となる形式が0期段階に近江地域のほか北陸や近畿にみられ，それら地域で影響し合って成立した可能性を考える。

北陸西部において高坏A・C，器台Aなどのように，これまで東海系と理解されることが多かった形式は植田氏の指摘の通り，近江在地形式によるところが大きいことを明らかにした。さらに甕A，壷Aなどの日常器的形式や壷Gなど，いままであまり追求されなかった形式についても近江系という理解に到った。近江地域において客体的な存在である「東海系土器」としてはS字状口縁甕があるが，北陸のものは小型品が多く，東海とは型式的比較が困難な「変容形」が多いので，東海地域からの影響はほとんどないと考えられる。

このような土器の北陸における受容のあり方を考える上で，甕の組成は興味深い。煮沸形式に関して，北陸西部では受口状口縁甕や受口状口縁鉢（偏平甕）などの形式はほとんど受容されず，甕Aのみが主体的に受容され，月影式系有段口縁甕と機能分化して併存しているかのようなあり方がみられた。この点から近江系統の土器が北陸西部に流入して在地の土器様式を崩壊せしめたとは考えにくく，受容する北陸西部側に一定の選択性が働いていることが伺える[15]。北陸西部各集落での新出形式の受容においては集落の性格差が出るが，それについては後述する。

また近江北東部において主体的である台付甕や，近江南部地域でその比率が高いと考えられる近畿庄内式系高坏が北陸西部においてほとんどみられないのは，北陸西部と関係の強い地域が近江の中でも特に琵琶湖北～北西部地域（姉川や安曇川以北の地域）であったためであると考える。

Ⅲ．壷Ｂ～Ｅの系譜と出現期古墳について

Ⅲ－１．北陸西部における壷Ｂ～Ｅについて

壷Ｂ～Ｅ（図３）の形式も北陸におけるＩ期新出形式の中で重要な形式であるが，今までみてきた形式に比べると，バリエーションに富み，捉えにくい面がある。先行研究では東海との土器交流を考える指標の一つとして壷Ｂ・Ｄに該当する形式を中心として分析されることが多く，北陸西部内でもその受容において若干の地域差があることが指摘されてきた（原田 1992・安 1997・出越 1999・堀 2001）[16]。

ここでは北陸西部と近江地域を中心に，これら形式の壷についてその系譜や受容のあり方について検討していく。また古墳の出現についてもこれに関わってくる問題であるので，それについても併せて検討していく。

さて，壷Ｂ～Ｅは口縁部と頸部の形状の組み合わせによって以下のように分類している。

壷Ｂ：　壷Ａ類似の頸部を形成後，粘土帯によって上下方へ拡張された口縁帯（ここでは複合口縁と呼んでおく）が形成される形式である。

壷Ｃ：　有段口縁壷の１種であるが，筒状の頸部から１次口縁が水平近くに開き出し，２次口縁部が強く外反して立ち上がる形式である。１次口縁部が長い点と２次口縁部の外反・外傾の強さが月影式系の有段口縁壷には見られない特徴である。

壷Ｄ：　筒状の頸部から１次口縁が水平近くに開き出し，２次口縁部が壷Ｂのような複合口縁となる形式である。

壷Ｅ：　壷Ｂのような“く”の字状の頸部と壷Ｃのような強く外反する口縁部の形式であるが口縁部内面の段が不明瞭なみせかけの有段口縁の形式も含める。

文様加飾：　Ｉ期段階を中心として，これらの壷においては口縁部外面（①），口縁部内面（②），頸部直下～肩部付近外面（③）を中心に文様が施されたものが多い。①の棒状貼付文（＋擬凹線文），②や③に施されることが多い山形文や羽状文は壷ＢやＤに多い文様であり，①に施されることの多い円形貼付文や竹管文は壷Ｃに多い文様であるが，古墳の祭式土器においては，その原則から外れるものが少なくない。一方，波状文は各形式の各施文部位で確認できる文様であり，壷の文様としては広い用いられ方をしている。

金沢市藤江Ｃ遺跡，千田遺跡，上荒屋遺跡など調査面積が大きくＩ～Ⅱ期の土器の出土量が多い遺跡では，個々の時期的位置付けは難しいが壷Ｂ～Ｅの各形式が特に偏りなく定量存在している状況が伺える[17]。また，これらの形式の壷は，加賀市小菅波４号墳のような前方後方墳のほか武生市

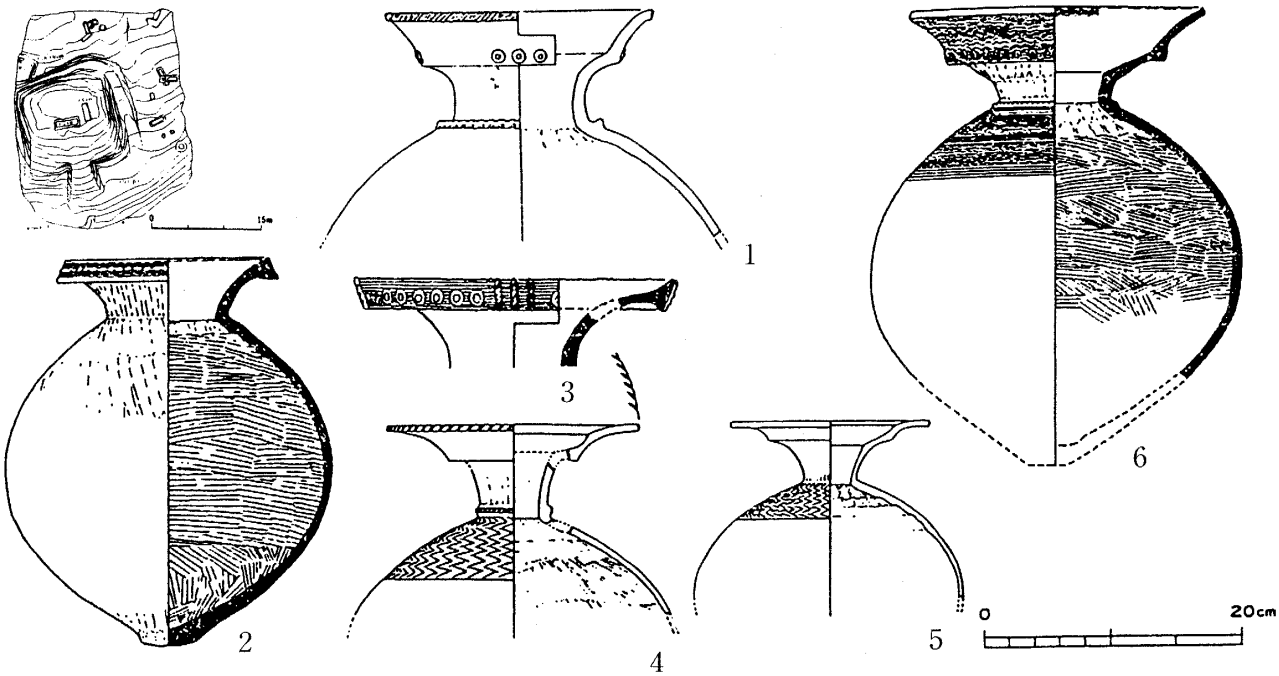

図15　小菅波４号墳とその祭式土器壷

岩内山12号墳などの小型方墳でもまとまって出土していること等から，Ⅰ期の古墳の祭式土器として，重要なものでありかつ一定の普及があったことが伺える。

Ⅲ－２．北陸西部におけるⅠ期古墳出土土器について

北陸西部のⅠ期段階は，前方後方墳が首長墳などに採用されるようになることや，壷が古墳の祭式土器として重要な役割を担うようになること等，墓制面においても大きな変化が認められる段階である（小嶋 1983，前田 1993・1997ほか）。Ⅰ期の古墳の祭式土器は甕をほとんど含まず，壷A・B～D，高坏A・Cなどがみられる。月影式系土器の出土は多くない。古墳から出土する土器は２次的移動（元々は墳丘上各所に置かれていたものが多いと考えられる）を経たものばかりであり，遺跡ごとに多様な組み合わせとなっている。低地立地の古墳群では墳丘の削平や集落域からの遺物の混入を考慮する必要がある。

古墳の祭式土器となっている壷Aや高坏については集落遺跡出土のものと変わりないものが多いが，壷B～E等の加飾壷は集落のものに比べると特異なものが多い[18]。古墳の祭式土器としての加飾壷には，墓の土器としての特別性や区別する意識がある程度働いていたと考えることができよう。このような土器が集中的に出土し，また北陸において出現期の前方後方墳である小菅波４号墳の位置付けが重要になってくる（図15）。小菅波４号墳では東海系墓制の前方後方墳の祭式土器において，畿内系の要素が大きいという，東海系と畿内系の錯綜状況が想定されることが多い（小嶋 1983，大村 1995，前田 1997，中屋 1997，堀 2001ほか）。これらの墳形や土器の系譜については，後に検討することとする。

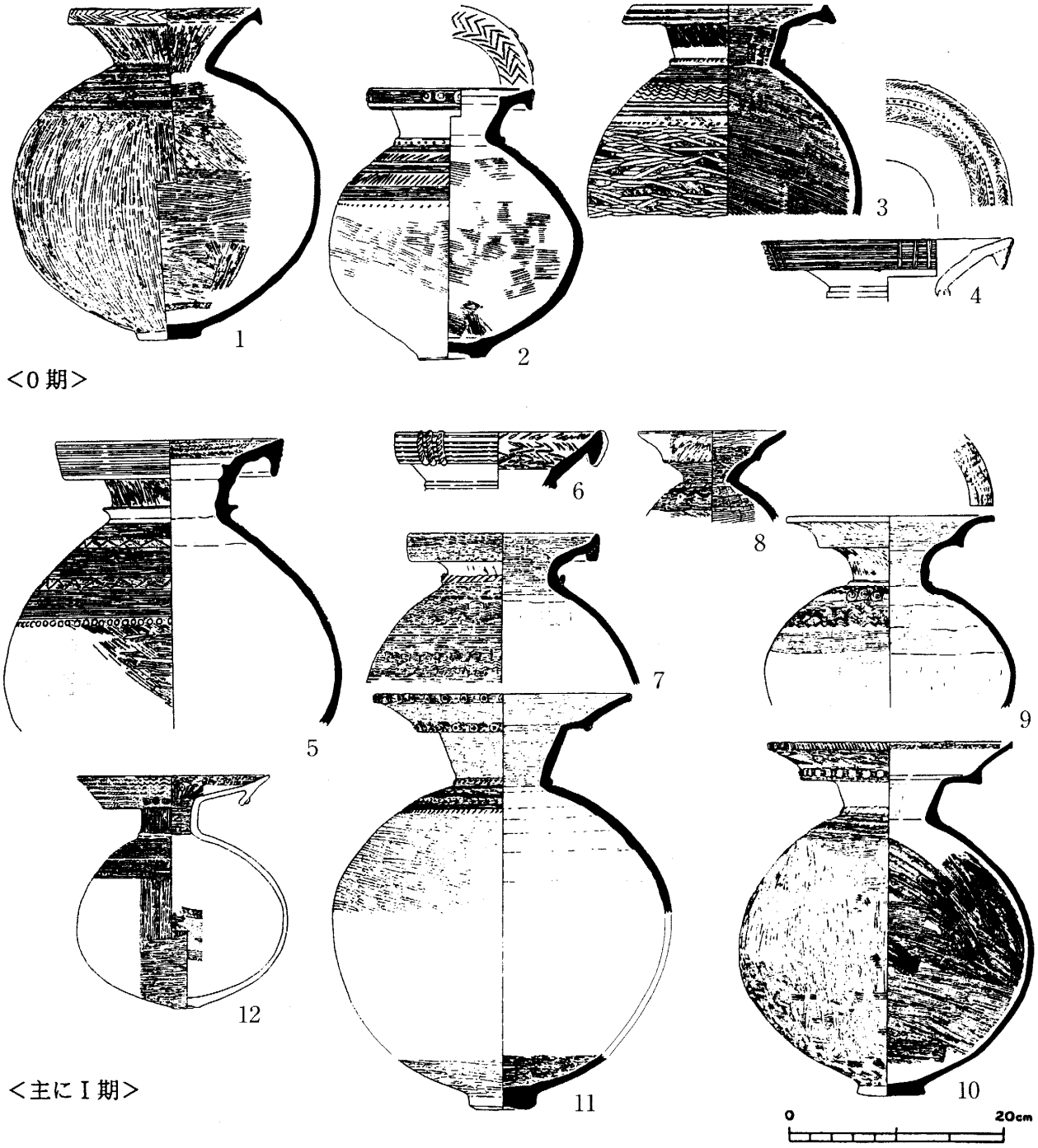

図16　壷B～Eに類する形式

Ⅲ－3．近江地域における壷B～Eに類する形式と墳墓の祭式土器

0期：　壷Bに類する形式（図16　1・2・4）と壷Dに類する形式（3）は近江の弥生時代後期の広口加飾壷の系統上のものと考えられるが，濃尾地域と親縁性のある在地形式と理解される（宮崎 1994)。複合口縁を有し，施文されたものが多い。施文部位は口縁部外面（①）口縁部内面（②），頸部直下～肩部付近外面（③）の3箇所であるが②は省略されることがある[19]。

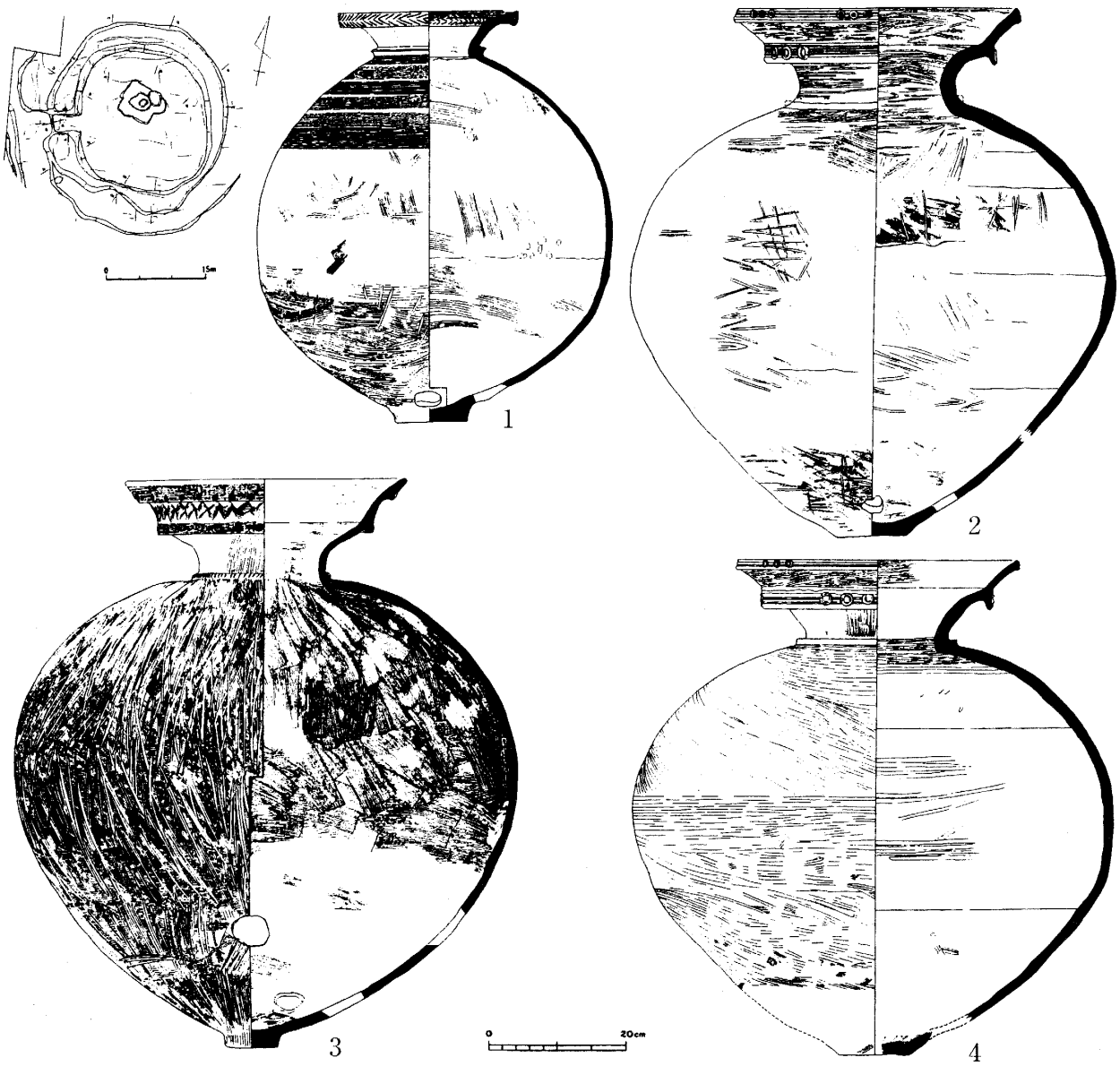

図17　五村遺跡円形周溝墓とその祭式土器壷

①の文様としては擬凹線文が多く円形貼付文，竹管文，棒状貼付文などが組み合わさる。ほかに波状文もみられる。羽状文も少ないながら認められる。②の文様は羽状文を主とする。③の文様は平行直線文と波状文または斜線文などを組み合わせた文様が多い。平行直線文と山形文を組み合わせた文様についても，長浜市北郷里小遺跡T 9 －SH02出土例など0期段階から確認できる。

この種の壷は長浜市十里町1号周溝墓など，墳墓の祭式土器にもなっており，加飾壷と無紋の壷を組み合わせた，壷を主体とした土器祭式は近江地域では方形周溝墓の土器祭式以来の伝統的なものであると考えることができる（吉田 1990）。

壷C，Eに類する形式に関しては墳墓出土資料の一遺跡例のみであり，集落遺跡には基本的に認められない。（図17）は虎姫町五村遺跡円形周溝墓の墳丘縁辺部各所から元位置に近い形で出土し

た祭式土器で，器高80cm前後の大型特別形式である。円形墓という近江においては新来の墓制と合わせて考えれば，この段階に新しく取り入れられた形式と考えてよいだろう（搬入品ではないようである）。円形墓の時期ごとの分布の広がり方からみて，畿内地域や丹波地域など西側からの影響が考えられる[20]（岸本 2001）。よって0期段階の近江にみられる壷C・Eに類する型式は，いわゆる近畿庄内式系の二重口縁壷と考えられる[21]。文様は口縁部上下端外面に擬凹線文と円形貼付文を施すものや口縁部外面に波状文や円形貼付文を施すものがある。

なおこの段階に前方後方（円）墳が成立しているという考えは，後述の通り問題が多いと考える。

Ⅰ期：　（図16　5～12）は主としてⅠ期段階と考えられる壷B～Eに類する形式である。厳密な編年的位置付けが困難なものが多い。

壷Bは基本的に前段階を踏襲している。③の文様は（5）のような直線文と山形文の組み合わせより，（7）のような直線文と波状文を組み合わせた文様の方が多い傾向にある。

壷C（9～11），E（8）は，集落遺跡においても近江各地域で出土がみられるようになる。波状文や円形貼付文を中心とした文様が施される。口縁部外面の施文は五村遺跡のものと共通性がみられる。古墳出土資料において口縁部外面に円形貼付文と壷Bに多い棒状貼付文を組み合わせた壷C（図18）がみられるため，在地化が進んでいると考えることができる。（12）は垂下口縁加飾壷と呼称されるもので，文様構成など外見は壷Cと類似するが口縁部が上方ではなく下方を中心に拡張された形式である。多くはないが近江各地域の集落や古墳に出土がみられる。

この段階の代表的な古墳として，小松古墳についてみていく（図18）。湖北地域高月町の小松古墳は墳丘長約60ｍの前方後方墳で，近江・東海・北陸地域におけるこの時期の古墳が墳丘長20ｍあれば大きい方であることを考えれば破格の規模といえる。盗掘坑等の調査から副葬品として少なくとも後漢鏡2面（破砕鏡の可能性），鉄鏃数種，銅鏃，鉄製工具・漁具数種が存在したことが明らかになっている。土器は主に埋葬施設上にまとめ置かれたことが分かるような状況で出土している。図示したような種類の壷や高坏Aなどの高坏（坏底部が穿孔されている）の出土が多く，他に手焙形土器や月影式系有段口縁小型土器（3）などが出土している。壷は出土底部のほぼ全てが焼成前穿孔されていることが判明している。文様の施されたものが多く，集落遺跡など他の遺跡ではみられない形式が少なくない。（1）は壷Bに類する形式であるが口縁部外面真ん中付近に2条の隆起突帯を巡らせ，口縁部外面に波状文，円形貼付文，棒状貼付文が施される。（4）はこの形式としては異例の大型品である。この形式にも胴下部に焼成前穿孔がみられる。（5）のような壷C・Eに類する形式のものは口縁部外面に円形貼付文のみならず棒状貼付文も組み合わさっているものが多い。このような特異な文様や形式の存在，底部（付近）への穿孔，といった点から集落の土器と区別しようという意識が強いことが分かる。そしてその志向性がこの小松古墳において特に強くみられるのは，副葬品や墳丘規模にもみられるこの古墳の隔絶性と関わってくるのであろう。

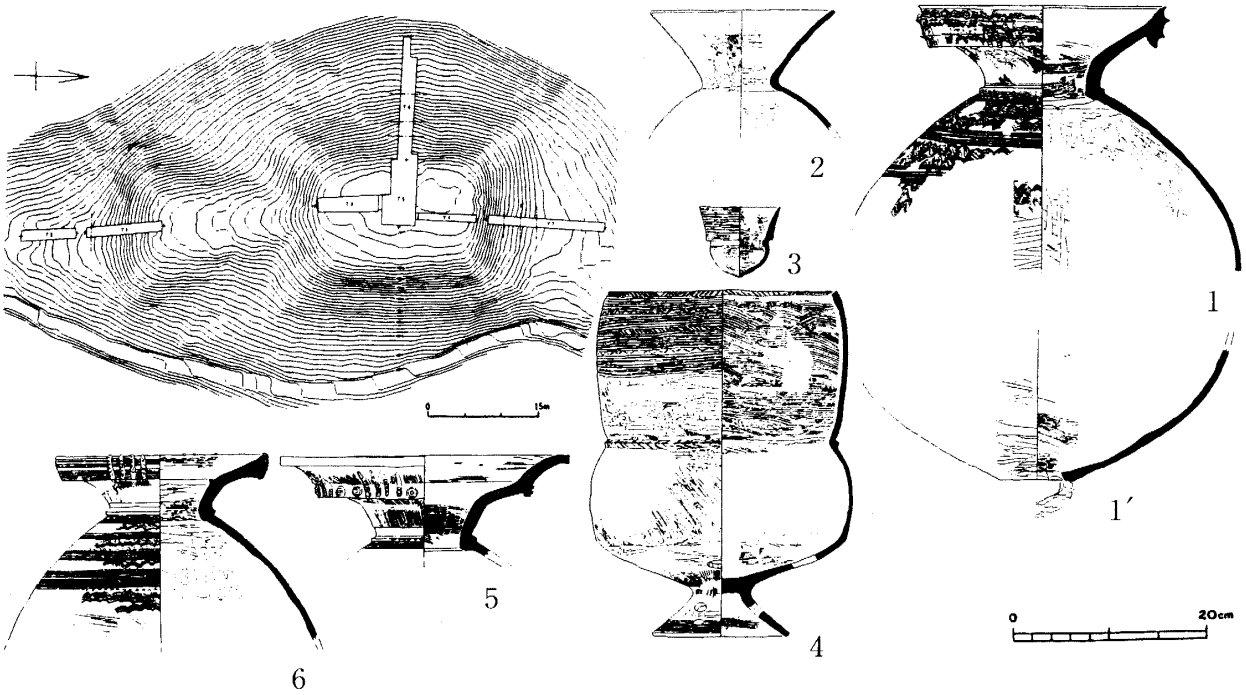

図18　小松古墳とその祭式土器壷

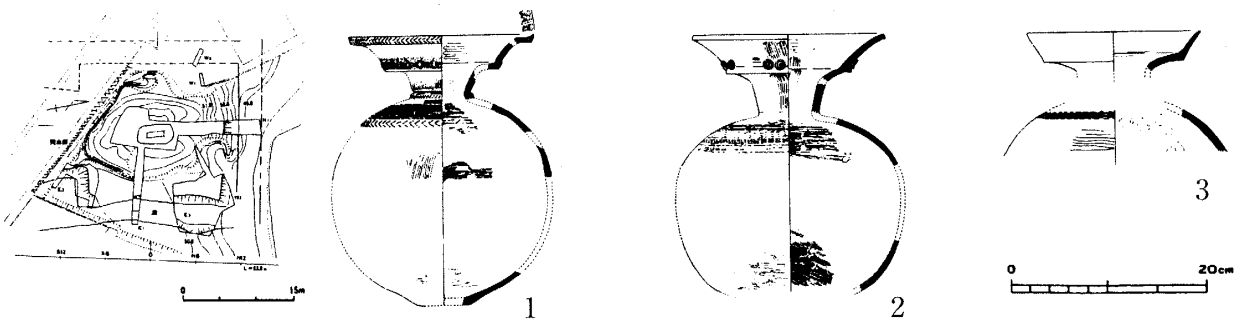

図19　芝ヶ原12号墳とその祭式土器壷

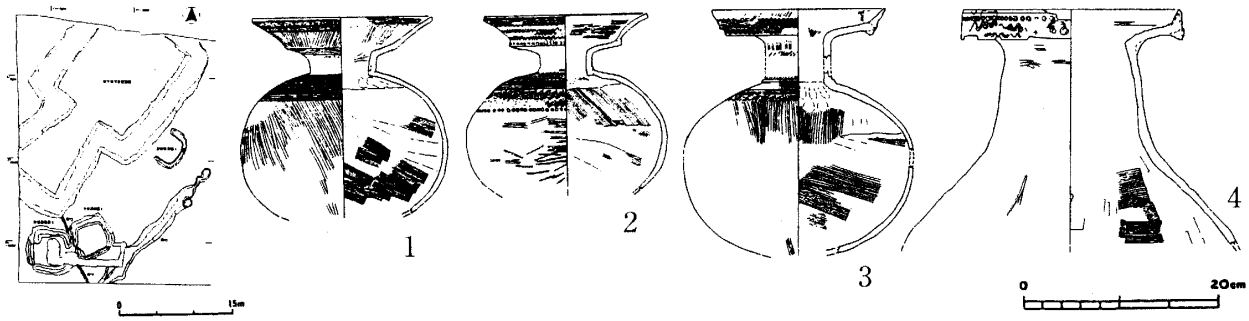

図20　小路遺跡前方後方墳とその祭式土器壷

Ⅲ－４．前方後方墳の成立に関する問題

前方後方墳の出現過程や系譜に関する問題は，特に東日本における古墳の出現を議論するうえで重要になってくる問題であり，北陸においてもしかりである。近年の研究では，前方後方墳の成立過程を前方後円墳とは区別する考えがとられることが多く，尾張などの伊勢湾沿岸地域や近江地域を前方後方墳の成立地域とみる考えが主流になりつつある（赤塚 1996，植田 2001ほか）。前方後方墳が，畿内地域を中心とする前方後円墳の墓制とは対峙するような関係にある東海系の墓制とみる考えは，「地方」における古墳出現の史的解釈にも関わってくる重要な問題であり，ここで詳しく検討したい。結論から言うと，前方後方墳を東海系の墓制とみなすには問題点が多く，寺沢薫氏の指摘の通り，前方後円墳が成立する過程で，そこから派生する形で成立した墓制であり（寺沢 2000），古川登氏が北陸における古墳の出現について論じたように，近畿地域との関係[22]を重視すべきであると考える（古川登 2003）。西日本における前方後方墳の状況をみれば，前方後方と前方後円が政治的に対立的な構造にあったとは考えにくい（大村 1995，福永 1999，北条 2000，兼安 2001ほか）。

Ⅰ期段階では東海地域勢力と強い関係をもち，Ⅱ期から段階的に近畿地域の勢力に組み込まれていくという考え（前田 1997，堀 2004ほか）ではなく，当初から大和地域に中心をもつ墓制を山城・近江を経由する形で受容したものが，北陸における古墳出現期の墓制の実態であると考える。

Ⅲ－４－１．尾張地域における古墳出現期の前方後方墳について

赤塚氏は廻間遺跡・西上免遺跡を中心とした尾張地域の土器編年（「廻間編年」）を元に，日本各地域の東海系と考えられるものを検討し，東海系土器とともに人々や前方後方墳・加飾壷を中心とした土器祭式が広域に拡散すると考えた。東海系土器，前方後方墳などの東海系文化が畿内系文化（庄内式系甕・布留式系甕・前方後円墳）に先駆けて北陸や東日本を中心に一方的に膨張するという構図を描いている（赤塚 1990・1992・1996・1999ほか）。これは寺沢薫氏などが提示した，中心地域（畿内）から地方への一方的な文化の流れが古墳出現期段階から存在するという古墳時代観へのアンチテーゼとして提示されたものであったが，東国を中心に影響を及ぼした中心地域としての東海西部地域を主張している点において，古墳出現期における中心地から周辺地域への一方向的な拡散という構図に変わりない。そして，このような考え方が従来の白江式＝東海地域の影響力の波及，といった考え方につながっていく。

前方後方墳[23]を東海系の墓制とみる考えの基準資料となっているのが，愛知県の廻間遺跡SZ01と西上免古墳であり，ここではその位置付けについて検討していきたい。

赤塚次郎氏は前方後方型墳墓の変遷過程を論じる中で，廻間遺跡SZ01のようなＢ３型墳が伊勢湾地域においていち早く成立（本稿の０期初頭段階）したとする。さらに廻間遺跡が尾張地域の当該期における平均的な集落とその共同体墓であるとの位置付けから，伊勢湾地域においてＢ３型墳が一般的に定着し，定型化していたと述べている。

廻間SZ01は，墳丘周溝外側の土坑群上に散在するＡ群土器（SU01）を築造時の祭祀とみなし，

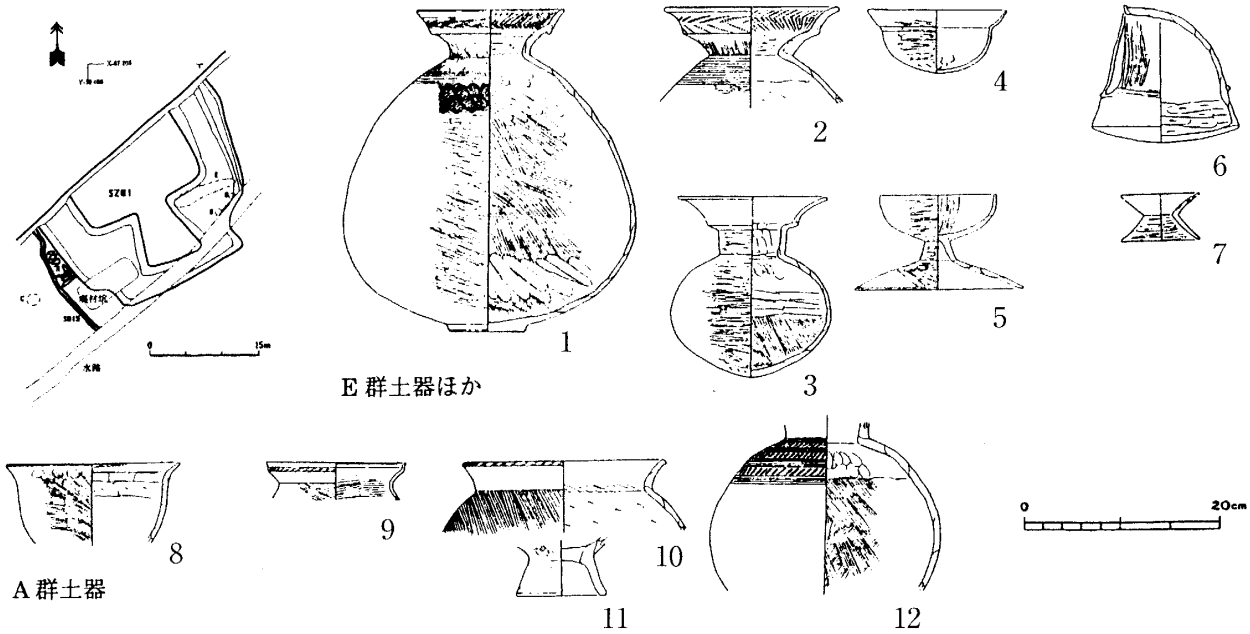

図21　廻間SZ01と出土土器

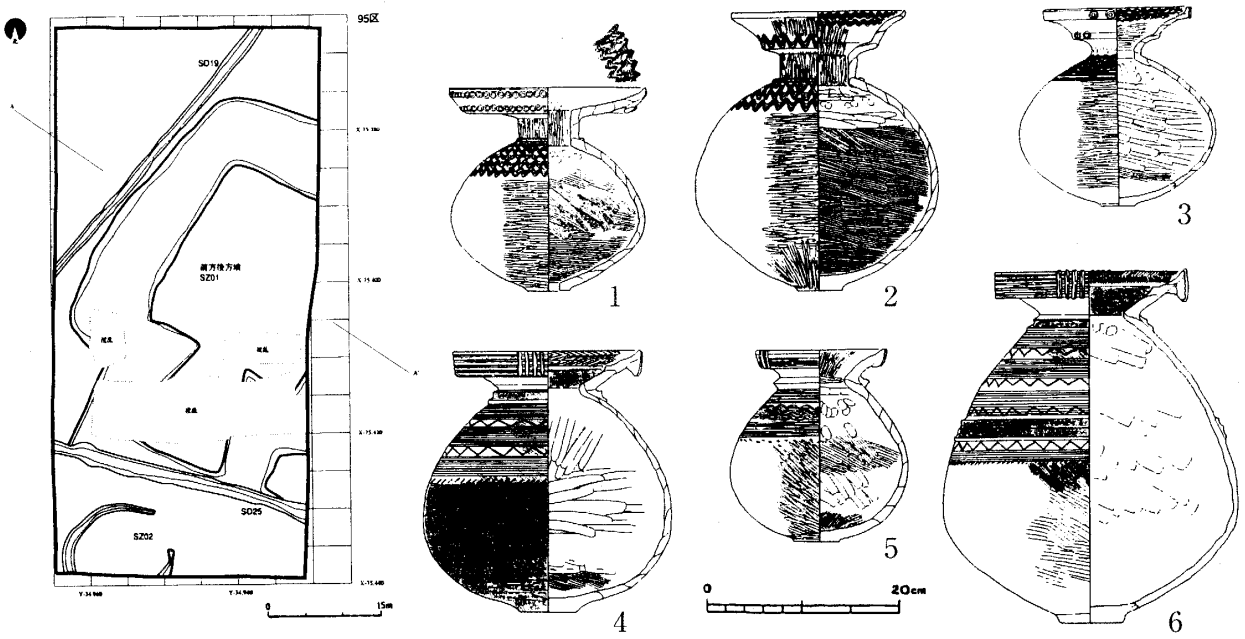

図22　西上免前方後方墳とその祭式土器壷

廻間Ⅰ式の初頭に位置付けられ，墳丘側から周溝への流れ込みの土器であるE群土器は廻間Ⅲ式期の追祭祀のものと解釈されている（図21）。しかし別の解釈も可能である。A群土器[24] など古い土器はその組成が集落の土器相に近く，厳密に遺構に伴うものでもない。近接して廻間Ⅰ～Ⅱ式期を中心とした集落遺構が展開していることから，そこから土器が廃棄されたり，墳墓築造前から集落的な遺構や包含層が形成されていた可能性は十分考えられる。一方，E群土器は二重口縁壷や加飾

壷など，古墳の祭式土器と考えて問題のない組成であり，出土状況から墳丘上に置かれていたものが周溝に転落したと考えて大過ないものである。墳墓築造開始から埋葬・墳丘完成後の祭祀までそれ程の時間差を考えず，墳丘上に置かれていた祭式土器の可能性が高いE群土器の段階（廻間Ⅲ式，本稿Ⅱ期段階）が廻間SZ01の時期と考えたい。

また赤塚氏は尾張地域において前方後方型墳墓が古墳時代初頭段階から定着的な墓制であることを予見していたものの，次に述べる西上免古墳のほかは，ほとんど類例が増加していないという状況にある。廻間SZ01が上記の通りⅡ期段階のものであるならば，東海地域における前方後方墳は段階的変遷を経ず，Ⅰ期段階に西上免古墳が突如として出現すると考えられる。

西上免古墳は前方部周溝と重複するSD25出土土器群から廻間Ⅰ式4段階から築造が開始されたと考えられているものの，古墳の祭式土器は廻間Ⅱ式前半段階のものを中心とし，本稿のⅠ期段階とみて大過ない（図22）。墳丘上各所に置かれていたものが，周溝内に転落したと考えられる祭式土器は，加飾壷が目立つが，東海系のいわゆるパレススタイル壷（4～6）のほか，廻間Ⅰ式の在地形式からは系譜の追えない口頸部形態をもつ二重口縁壷（2・3）や垂下口縁加飾壷（1）が一定量出土している。これら二重口縁壷や垂下口縁加飾壷は大和・山城などの近畿地域や近江地域の影響が強い形式と考えることができ，それら壷の櫛描文や貼付文等による加飾も「東海系加飾」とみなされる必要はなかろう（小池 2003）。

このように現状の東海地域における古墳時代初頭の前方後方墳の様相からいって，必ずしも前方後方墳の中核地帯と言えるような状況ではなく，かつ出現期の西上免古墳の墳墓祭祀においては近畿地域的要素が少なくないのである。Ⅱ期の象鼻山1号墳（美濃地域）や東之宮古墳なども，東海地域の特殊性が強調されることの多い古墳であるが，近畿地域等西日本の古墳の影響が強いとみたほうがよい要素（土器のみならず）が少なくない。近畿等西日本の古墳の影響を前提としたうえで，東海地域の特殊性が論じられるべきであろう。

Ⅲ－4－2．近江地域・大和周辺地域について

もう一つの前方後方墳出現地と目されることのある近江地域についても，本稿の0期段階に位置付けられている法勝寺SX23や神郷亀塚（植田 2001・2004）は，廻間SZ01についての検討同様に出土土器の解釈の仕方により，Ⅰ～Ⅱ期まで下る可能性が高いと考える。おおまかにみて，近江地域や東海地域では弥生時代の方形周溝墓の段階から壷を中心とした祭式土器組成となっており，Ⅰ期段階の古墳でもそうであるので，0期段階の前方後方（円）墳墓のみそれらとは傾向を異にして特異な祭祀が行われているとは考えにくいのである。

古墳出現期段階の近畿地域内においても，大和周辺地域では前方後方墳が主体となっている地域が少なくない。山城地域の芝ヶ原12号墳（図19）や河内地域の小路遺跡「前方後方型周溝墓」（図20）など，Ⅰ期段階の良好な前方後方墳の資料が知られる。

芝ヶ原12号墳では，墳頂部の埋葬施設直上に礫を集積してそこに土器を遺棄するという祭式が行われている。これは瀬戸内沿岸地域の弥生墓制に系譜を求めることができ（大谷 1995），Ⅰ期段階

以降は近畿地域の古墳等においても採用されるようになる祭式であるが，古墳の祭式土器は加飾された二重口縁壷や垂下口縁加飾壷が中心となっている。

小路遺跡の前方後方墳は，墳丘が削平されているが墳丘上各所に置かれていたものが周溝に落ち込んだと考えられる祭式土器がまとまって出土している。祭式土器は二重口縁加飾壷を中心に，垂下口縁加飾壷や瀬戸内地域と親縁性の強い広口壷などで構成されている。

東海地域や東日本のものも含めてこういった前方後方墳については，寺沢薫氏の考え（寺沢 2000）と同じく，大和地域を中心とした初期前方後円墳の成立に連動，影響を受けて成立する墓制である可能性が高いと考えるが，その鍵となる大和地域の纒向古墳群の位置付け自体がしっかり定まっていないという問題もある。纒向遺跡での集落の営みは，庄内０式を前後する段階から活発になると考えられているものの，庄内式前半段階（本稿０期段階）に位置付けることのできる古墳の存在は不明確である。それは良好な祭式土器の一括資料を得ることのできた古墳資料が少ないためである（小池 2003)。本稿Ｉ期段階には成立していると考えたいが，祭式土器の良好な一括資料が得られたホケノ山古墳についても，布留０式期の箸墓古墳に先行するか，ほぼ同時期かで意見が分かれており，正式な報告書の刊行が待たれる。箸墓古墳出現以前に前方後円（方）墳が成立するという立場に立つが，その成立はどこか一地域が特別早いというわけでもなく，Ｉ期段階に北九州～関東地域の一部地域を除く各地でほぼ同時に出現している可能性が高く，その中でも墳丘規模等において大和地域がやや優勢な位置にあったと考える[25]。

Ⅲ－５．小結

以上のように今後解明されるべき問題が多いものの，近江，北陸西部における前方後方墳等の「古墳」の出現は，大和地域やその周辺地域での古墳成立過程に連動して成立したものであると考えられ，北陸西部では近江地域との強い関係の元，その墓制を導入したものと考えられる。

北陸西部の壷Ｂ・Ｄは，近江在地の形式として０期（以前）段階から存在していた形式が，Ｉ期段階に北陸西部で受容されたものと考えられる。壷Ｃ・Ｅについては，０期新段階に近江地域で外来系（近畿系か）墳墓祭式の一つとして取り入れられ，Ｉ期段階には北陸と近江の両地域の集落・古墳において定着する形式と考えられる。

墳墓祭式土器に用いられる壷Ｂ～Ｅは集落のそれと比べるとやや特殊なものが多く，集落の土器とは区別しようとする意識が見受けられるが，その様相は墳墓によりややバラツキが認められる。加賀市小菅波４号墳にみられる祭式土器壷（図15）の様相について，従来は東海系要素と近畿系要素の影響の交錯が想定されてきた（小嶋 1983，大村 1995，前田 1997，中屋 1997，堀 2001ほか)。厳密な対応は難しいが，北陸西部における壷Ｂ～Ｅのあり方からみて，近江地域における古墳祭式土器との関連性が強いものと理解するのがよいであろう。

Ⅳ．北陸・近江・近畿の地域間関係と新来文化に対する北陸西部社会の対応

従来，北陸地域における古墳時代初頭段階における土器や墓制の変遷には東海地域の影響や政治的関係をみる考えが多かった（原田 1992，前田 1997，堀 2004ほか）が以上のように古墳時代初頭の北陸西部における近江地域との関係性の強まりによって土器や墓制等が変化する様相を捉えることができたかと思う。さらに北陸西部が近江地域（特に琵琶湖北～北西部地域）との関係性を強めた背景には，北陸西部社会のベクトルの先が近畿中心部を向くようになったためと考える。

前段階の月影式は閉鎖的土器様式と理解されることが多いが，日本海沿岸地域内での強い親縁性が想定できる（赤塚 1999）ので，古墳時代初頭のこの変化は大きいものである。

近畿との関係は，前章でみた新たな墓制の導入のほか，鉄器など物資の主要流通経路に変化が起こっているであろうことや，高温操業の鍛冶による新たな鉄器製作技術の導入等の問題（村上 2000，林 2002ほか）についても，近畿地域との関係を考えていかなくてはならないだろう。このような北陸西部の変化に対しては，琵琶湖北部地域の小松古墳など古保利古墳群の母体集団が中継拠点的な存在であったと考えられ，琵琶湖北部からの水運が重要な役割を果たしたと考えられる（図１・18）。大村直氏の指摘の通り，土器様式の地域的伸縮は，政治的意味合いよりは，「交通」の結果を反映しているところが大であり[26]，また「交通」が重要になりそれが拡大するほど，「交通」を独占する地域首長の地位が強化されることになるのである（大村 1995）。

ここでは詳しくみていく余裕はないが，大局的にみて，Ⅰ期段階においては，北陸西部・近江（湖北～湖西）・山城・大和地域，と土器様式において漸移的な差異が認められ（大和地域と近江地域・北陸西部地域とでは違いが大きいが，山城を介することで差異が漸移的となっている[27]）のに対し，時間的にはⅡ期，Ⅲ期とこれら地域の土器様式は順次「布留式」的な斉一的土器様式へと変わっていく。大和地域を志向するリレー式の地域間関係がⅠ期段階以降成立し，段階的に土器様式の地域差が解消されていくと考えることができる。

次にこのような地域間関係の中，北陸西部が新来の文化に対してどのような対応をとっていったのかをみていきたい。

まず，北加賀北部～越前地域におけるⅠ期段階の代表的集落の土器様相について類型化を試みる。甕，高坏，器台の組成により３類型が見出され，さらに壷は整理するのが難しいが，壷ＡやＧの量比を基準として，次のような４類型に整理できる。

Ａ１類型： 甕は主として月影系有段口縁甕と甕Ａで構成される。高坏はＡ・Ｃ・月影式系がそれぞれ一定量みられる。器台はＡや月影式系が一定量ある。壷はＡ等の新出形式と月影式系壷の量比がどちらかに大きく偏らずに共存している。

Ａ２類型： 甕，高坏，器台の組成はＡ１類型と同様であるが，壷は壷Ａが認められない，又はごく少量で，月影式系有段口縁壷が主体となっている。

Ａ３類型：　月影式の有段口縁甕・高坏・器台が主体となり，甕Ａ，高坏Ａ・Ｃ，器台Ａはほとんど認められない。壷はＡが認められず，月影式系有段口縁壷が主体となっている。

Ｂ類型：　甕は主としてＡと月影式系有段口縁甕で構成されている。高坏，器台は月影式系のものがほとんど認められず，高坏Ａ・Ｃと器台Ａが主体となる。壷は月影式系がほとんど認められず，壷ＡやＧなどの新出形式が主体となっている。

	北加賀北部	北加賀南部	南加賀	越前
Ａ1類型	松寺　近岡ナカシマ　南新保Ｄ　北安江？　西念南新保？　千田？	上新庄ニシウラ　倉部出戸　横江古屋敷？	漆町	
Ａ2	寺中Ｂ	新保本町東		西谷
Ａ3		御経塚ツカダ		
Ｂ類型	藤江Ｃ　南新保Ｃ　二口六丁？　畝田？	上荒屋　下安原　額新町　相川新	荒木田　千代能美？	長泉寺　今市？

表：Ｉ期段階における北陸西部地域各集落と土器組成による類型化（四角囲いはＩ期新出集落）

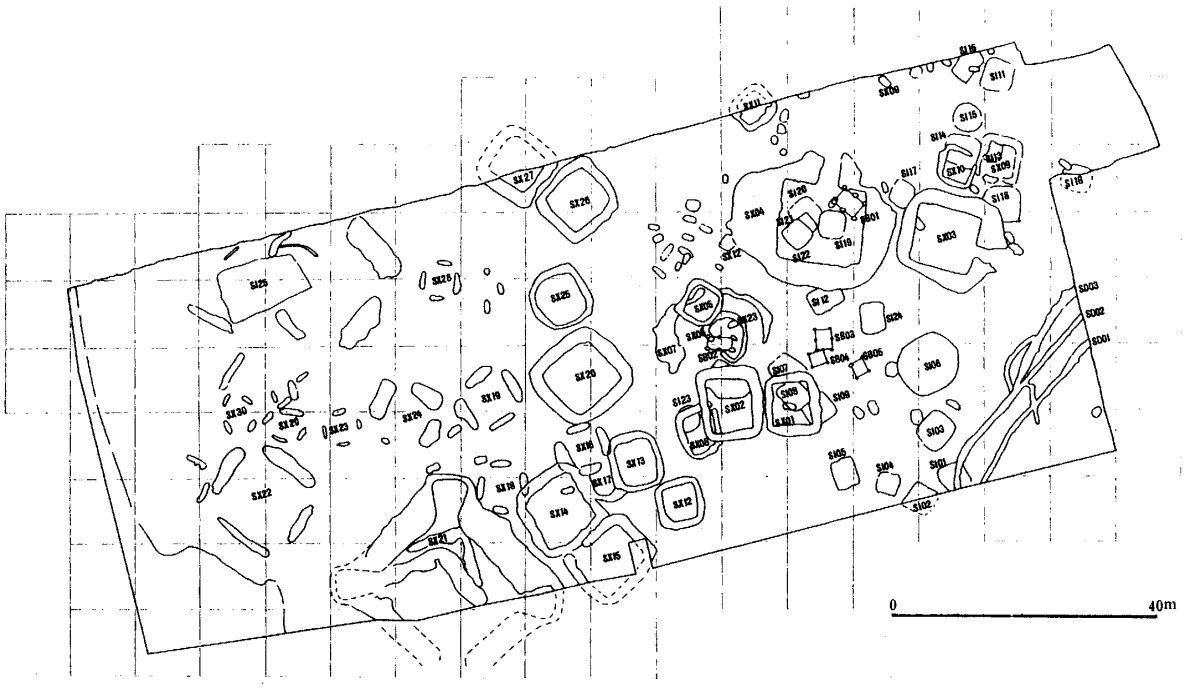

図23　旭遺跡一塚地区主要遺構（弥生～古墳時代）

表からみてB類型の遺跡はⅠ期に営みを開始または再開する遺跡〈新出集落〉が多いのに対し，A類型の遺跡は0期から継続して営まれている遺跡〈継続集落〉が多い[28]。継続集落において甕・高坏・器台・壷など月影式期からの伝統的形式が一定量使い続けられていることに特別性は感じない。それに対して新出集落では高坏・器台・壷が新出形式にほぼ一新されるのに対し，甕は伝統的形式を一定量残存させていることは注目しておきたい。またA3類型のように全ての形式においてほぼ月影系の土器で構成されるような遺跡は例外的なものであることがわかる。

Ⅰ期の土器様式の変化・新出形式への一新は新出集落（B類型集落）を中心として起こっていることがみてとれた。前述の通り，古墳の祭式土器においても壷A・B～D，高坏A・Cなどの新出形式が中心となっており，壷B～Eの加飾壷に関しては集落の土器とは区別しようという意識が働いていた可能性がある。そしてもう一つ重要な点は，B類型集落を中心として各形式が一新されるなか，甕においては月影式系のものが一定量残存することである。前述の通り，甕Aと月影式系有段口縁甕は別々の機能を分かち合うかのように両形式が共存している様相がみてとれた。Ⅰ期新出形式のほとんどは，近江地域と親縁性の強い形式であるのだが，甕の受容の仕方からみて，近江系土器受容に際しては一定の選択性が働いていたと考えることができるのである。

土器における新出形式への転換の中心となっているⅠ期新出集落は，次にみる墓制の変化過程とも考え合わせれば，主として在地集団によって再編成された集落と考えられ，それが各小地域において拠点的な役割を果たしたと考える[29]。北陸西部内の小地域間，小地域内の「土器交流」やネットワークに関する問題については，安英樹氏が集落や小地域ごとの外来系土器相の差異を明らかにすることを通して，土器交流に関する興味深いモデルを提示している（安 1997）。外来系土器の系譜やあり方など，本稿の結果を通して再検討すべき点が幾つかあるが，このテーマに関しては，現在報告書作成作業中にある幾つかの重要遺跡の検討を行ったうえで考えていきたいと思う[30]。

墓制の変遷については，松任市旭遺跡一塚地区において，月影式段階の四隅突出墓から白江式段階の前方後方形へという「首長墓」の変遷を同一の墓域内でスムーズに追うことができるので，首長系列の変革はおこっていないと考えられる（古屋 2003）。Ⅰ期段階以降の墳墓祭祀の変革は，主として在地首長が外的墓制要素（近江地域や近畿地域の「古墳」を志向したもの）を取り入れることにより進められたものであると考えることができるのである。

以上のような構図は，大村直氏が古墳出現期における東日本を対象として大局的に示した「周縁地域」の古墳時代像に近いものであるが（大村 1995），本稿での北陸西部と近江地域における土器を中心とした比較分析等から，より具体的な地域間関係や外来系文化の受容動態をつきとめることができたのではないだろうか。北陸外での月影式系土器の様相や，山陰系土器の動態など，論じ残したことは多いが，今後検討を重ねていきたい。

小稿は平成15年12月に東京大学大学院人文社会系研究科に提出した修士論文の一部を修正したも

のです。小稿を作成することができましたのは，資料調査等で多くの方々にお世話頂き，多大な御教示・御指導を頂くことができたおかげであります。後藤直先生をはじめとします先生方や学兄の方々には日頃より数々の御指導や刺激を受けさせてもらっております。資料の実見にあたりましては下記の諸機関に大変お世話になりました。

石川県埋蔵文化財センター，金沢市埋蔵文化財センター，小松市教育委員会，福井県埋蔵文化財センター，清水町教育委員会，今立町教育委員会，滋賀県文化財保護協会，滋賀県立安土城考古博物館，能登川町埋蔵文化財センター

註

1）地域区分名は便宜的に以下の通りとする。
北加賀北部：金沢平野の中でも屑川以北の地域。
北加賀南部：金沢平野の中でも屑川以南の地域。
南加賀北部：手取川以南，木場潟以北の地域。梯川流域の遺跡が主たる分析対象となる。
南加賀南部：柴山潟付近～大聖寺川流域付近の地域。
越前地域：福井県嶺北地域を対象とする。調査数等の問題で資料数が乏しいため，本稿では細分しない。

2）今回の「白江式」と「古府クルビ式」の区分や様式内容については，堀氏と異なり田嶋氏の区分に近いものとなっている。堀氏は様相11～13を「白江式」としており，田嶋氏設定の白江式とは概念が異なることを強調している。堀氏は様相14での「定型化した布留甕」の成立をもって画期とする区分であるが，氏の提示した基準資料の変遷案からはむしろ様相12と13の間に，いわゆる布留式系甕や山陰系甕の出現または増加と器種分化（山陰系大型甕の出現）といった大きな変化を伺うことができ，本稿ではこちらの方が大きな画期であると評価した。いわゆる山陰系有段口縁甕と布留式系甕の出現については，堀氏は様相12段階で少数出現するとしているが，下がる可能性が高いと考えている。堀氏が提示した様相12の基準一括資料は８例あるが，そのうち山陰系有段口縁甕の出土は２例である。内一つの宮永坊の森Ｃ区１号住居覆土出土資料は共伴する高坏が口縁の開きや坏底部の形状から堀氏の高坏Ｆ３類にみえることから，この一括資料は様相13に下りうると考える。もう一例は畝田遺跡SK334出土資料で口縁部付近の破片が１点出土しているのみである。布留系甕については，２遺跡で１点ずつみられる口縁部付近の破片が様相12に位置付けられている。口縁部の形状が内湾気味であるものの，小片であるため布留式系甕と断定できる資料ではない。次の様相13には布留式系甕や山陰系甕が出土する一括資料が多いことからも北陸に山陰系有段口縁甕や布留式系甕がみられるようになるのは概ね様相13から，本稿Ⅱ期からと考えられる。

3）北陸北東部に分布の中心がある北陸在地系“く”の字口縁甕である（安 2003ｂほか）。立ち気味で外反する口頸部形状（“コ”の字に近い“く”の字形口縁）と口縁端部を面取りすることを特徴とした甕である。口頸部内外面を最終的に丁寧にヨコナデする点と胴部形態は月影式系有段口縁甕と共通性がある。北陸北東部の甕（主に“く”の字状口縁甕）について時期別に検討した安英樹氏の成果によれば，この形式の甕は弥生時代後期には成立しており月影式期以降北陸東部において甕の主体的形式となっているようである（安 2003ｂ）。上記形式的特徴から，後述するⅠ期以降の甕Ａとは異なるものと考えており，本稿ではこの「能登型」甕を甕Ａとは区別している。

4）胎土研究があまり進んでいないものの，Ⅰ期段階以降北陸の土器様式に影響を与える「外来系」土器については，搬入品といえるものは少ないと考えられている。大多数が在地での模倣品であり，外来地域からの人の移動は小規模と考えられる（原田 1992　高橋 1995　安 1997）。

5）胎土研究から布留式系甕は大和地域においても，加賀南部で製作されたものが持ち込まれたものが多いとされ，布留甕は加賀南部で成立したかのような考えが示されている（奥田 1998ほか）。しかし型式学的にみて，北陸西部において布留甕が成立したとは，なかなか考え難いものがある。久住猛雄氏が藤崎遺跡7号方形周溝墓祭式土器の分析から，加賀南部産とされた布留系甕の胎土の解釈に問題があるのではないかと指摘したとおり（久住 1999），型式学的検証や遺構・遺物の解釈に矛盾が生じないかも合わせて考えていかなくてはならない。

6）鯖江市長泉寺遺跡の井戸状遺構SK18一括廃棄の遺物として共伴する月影系有段口縁甕と甕Aを比較すると，ススの付着範囲に明瞭な違いが認められた。甕Aは胴下部～底部付近にススの付着が見られないのに対し，月影式系有段口縁甕は底部を含め胴部全体にススの付着がみられることから甕Aは炉の中に底部を埋め込むように据え置いて火にかけたのに対し，月影式系有段口縁甕は接地せずに火にかけた（ススは火を止めてからの付着）可能性が考えられる。このような違いには煮沸内容物の差異が反映されている可能性がある。小林正史氏はコメ・オカズの調理とそれぞれに適切な煮沸用器の形状などについて言及されており（小林 1994），それにそのまま対照すれば，有段口縁甕がコメの煮沸用器，甕Aがオカズの煮沸用器に適しているといえるかもしれないが，検討すべき点も多く，今後の課題としたい。

7）Ⅰ期の各遺跡の高坏A・Cには，文様を施したものが少数出土することが多い。文様や，形式による施文部位は規則的である（安 1993）。高坏Aのような中型高坏は坏部内面上半部が，高坏Cのような小型高坏では坏部外面上半部と脚裾部外面が施文部位となる。各施文部位には平行直線文・弧線文・山形文・斜線文などの複帯構成の文様（直線文＋その他，の組み合わせが多い）が施されるが，壷の文様に多い波状文は高坏にはほとんどみられない。

8）宮本氏は高坏Cのような形式を小型高坏のB・Cグループとし，（図2－23）のような形式を小型高坏のAグループとして谷内尾編年に沿って整理している（宮本 1985）。両者の関係については，同じ小型高坏の細別形式という以上の見解は示されておらず，系統的な検討はなされなかった。

9）近江地域の弥生時代終末期～古墳時代前期の土器編年については，植田氏や宮崎氏が近江東部地域や近江北東部地域の資料を中心とした編年案を提示しており（植田 1994，宮崎 1994），伴野氏が近江南東部地域を中心とした編年案を提示している（伴野 2003ほか）。植田氏は能登川町斗西遺跡の土器編年を敷衍する形で近江全域を視野に入れた古墳時代土器編年を行っている。斗西遺跡は土器の出土が近江でも屈指の量を誇り，完形土器にも恵まれるが，そのほとんどが大溝出土資料であり，編年作業に適した遺跡とは言い難い。周辺遺跡の住居址や土坑出土の一括性の高いと考えられる資料により補完しているのであるが，時間軸の鍵となる型式変化の提示やその検証を欠いている。宮崎氏の編年も同様な方法的曖昧さがあるが，高坏の型式変化は愛知県の廻間編年（赤塚 1990・1997）に概ね合わせてあるように見受けられる。ただし周溝墓の周溝出土資料を主な基準資料としているため器種組成に偏りがみられ，一括性についても検証する必要がある。

10）高坏における東海地域との相違は脚部形態において顕著である（小竹森 1988）。東海地域の0期段階（廻間Ⅰ式）では脚部（下部）の内湾傾向が強く，Ⅰ期の後半段階（廻間Ⅱ式後半）からA1のような脚部が主体となる（赤塚 1990）。つまり東海地域においてはA2に近い形状がA1に比べ古相の型式となっている。近江地域においては0期の古い段階からA1・A2の両者が共存していることから，東海地域の上記高坏脚部の型式変化には近江地域の影響がある可能性がある。

11）弥生時代後期の高坏と高坏Aのような高坏に断絶を指摘する意見が多い。前者を畿内系高坏，後者を濃尾地域の欠山式系高坏とする理解である（小竹森 1988・1991ほか）。しかし調整手法など連続性も指摘できる

12）ただし長浜市北郷里小遺跡ではT9区のみに集中的な出土がみられ，局所的に集中的な分布をみせる例として注目される。

13）高畠式期における「東海系高坏」から「畿内系高坏」への転換と理解されている（田嶋 1986，堀

2002ほか)。

14) ただし北加賀南部では局所的に台付の甕Gが目立つ事例が少し認められる。矢木ヒガシウラ遺跡では出土土器量のわりに甕の脚台の出土が目立っており，甕の主体形式になっている可能性がある。旭小学校遺跡土坑5からは甕Gのみ2個体分が出土している。

15) 着目点や外来系土器の解釈が異なるが北陸における外来系土器の選択的受容に関しては堀氏の指摘がある（堀 2001)。堀氏によれば，東海系高坏（本稿で高坏A・Cとしている形式）が北陸西部全体で在地の高坏に置換しているのに対し，東海系加飾壷や東海系台付甕は分布に偏りなどあると理解し，その現象を東海系土器に対する在地の選択性と解釈し，北陸在地の東海志向の差によって地域差が生じるとしている。つまり高坏は広く受容されているのに対し，その他の形式は地域・集落ごとの東海志向の差によって，受容の仕方が異なるとする。

16) 資料が充実している北加賀内での地域差として，北加賀でも南部の地域が北部より「東海色」が強いと指摘されている（堀 2001・安 1997・出越 1999)。しかし，藤江C遺跡や千田遺跡など最近報告された資料をみると，北加賀北部においても「パレススタイル」壷が少ないとは言えない状況となってきている。

17) 壷B～Eの形式の中で壷Cが目立つという地区・遺構の例はある（藤江C遺跡2次調査F区，近岡ナカシマ2号溝，畝田SK334（小片ばかりだが）など）が，壷B～Eが特別な出土状況を示す集落遺跡はみられない。各種遺構や包含層から甕や壷A1などの土器と混在廃棄されたような状況で出土している。これらの形式は古墳の祭式土器として重要な役割を担っていたと考えられるが，集落内でどのように扱われていたかは明らかにできない。少なくとも特別な廃棄のされ方は確認できない。

18) 松任市一塚SX02やSX04から出土している壷B系統の瓢形壷や肩部有文加飾の短頸壷は集落遺跡で確認できない形式である。文様面では，武生市岩内山12号墳出土の口縁部外面に擬凹線文＋棒状貼付文が施された壷Cや加賀市小菅波4号墳出土の肩部外面に複数段構成の羽状文が施された壷Cなど集落遺跡における壷Cの加飾方法のセオリーから外れているものがみられる。またⅡ期の事例となるが，上荒屋遺跡等の墓域に相当すると考えられている御経塚シンデン古墳群の祭式土器において，大型壷BやDが集落遺跡にみられない形式であることや，上荒屋遺跡の壷を飾る文様としては少数派となっている羽状文が祭式土器壷の加飾文様として多用されている。

19) 口縁部内面には文様帯区画として突起，段，肥厚帯が設けられたものが多い。また，文様帯区画は施されているが文様が省略されているものもみられる。

20) 円形周溝墓の祭式土器として壷C・Eに類する形式が目立つ遺跡としては，摂津地域の深江北町遺跡が代表的である。

21) 野々口氏の研究成果（野々口 1996）からみて，筒状頸部をもつ二重口縁壷（本稿の壷Cに類する形式）は，近畿地域に弥生後期末からある二重口縁壷と四国東部地域の広口壺の口頸部形態が融合するような形で，近畿の大阪湾岸地域で成立したと考えられる。

22) 氏が北陸最古段階の古墳とする清水町風巻神山4号墳に畿内大型古墳的な要素（土手状盛土・構築墓壙・破砕鏡副葬など）が認められるとしている。

23) 前方後方型墳丘の変遷が，赤塚次郎氏等の言うようにB1→B2→B3型「墳墓」→C型「墳」というように段階的に変遷するとは考えにくく，またC型墳成立以降もB型「墳墓」が併存するという状況にある。ここで前方後方（円）墳と呼ぶものは，主丘に対する突出部が陸橋以上の機能をもつと想定されるもの，つまり「前方部」長が主丘の1/2相当以上のものを指すこととする。

24) 廻間1式初頭一括資料とされるA群土器の中には，やや細頸の筒状頸部をもつ壷がある（図21 12)。正確な形式は不明だが，このような頸部形態は廻間編年においては二重口縁壷など廻間Ⅱ式期以降の壷形式と考えられないだろうか。

25) 大和地域を中心とした古墳の成立にあたっては，西日本を中心とした列島各地の弥生墓制要素が導

入されていると考えられている（北条 2000，寺沢 2000ほか）が，北陸西部地域や近江地域の集団もその動きに参画していると考えられる。

26）古墳出現期の「周縁地域」におけるあり方として，中心地域における改革が情報として拡散し，それに対する「周縁地域」側の積極的な受容姿勢の一端としてあらわれるのが，加速的な土器変化であると指摘している（大村1995）。

27）山城地域の土器様相については吹田 2003と高野 2003ｂ等を，大和地域の土器様相については寺沢 1986，次山 1993，関川 1999，青木 2003等を参考にした。高坏Ａ，高坏Ｃ，器台Ａに類する形式等は原田氏が「東日本型」と呼ぶ形式で（原田 1995，2002ほか），庄内式系の有段高坏，小型高坏，小型器台と対比的に捉えることができる。しかし，前方後円と前方後方が対立的なものでないのと同様，「東日本型」と庄内式系のそれら形式は機能的にもシンボル的にも密接な関係が想定されるし，近江南部や山城地域ではそれらが混在した土器組成となっている。

28）本稿では月影式期で衰退してしまう集落遺跡については検討しなかったが，木田氏は白江式という土器様式や墓制において変革のみられる段階には，集落消長の断絶もあることを指摘している（木田 1997）。北加賀地域の集落遺跡は月影式の終わりでほとんど断絶してしまうとまで言っているが，実際には表のように継続する集落も少なくない。

29）外来系土器の解釈の違い等，分析視点を異にするが，堀氏も外来系土器の受容差による古墳出現期の集落の類型化を行っている（堀 2004）。外来系土器優位の集落は，その地域において盟主的な集落であり，在地集団間の階層差の正当化のために外来系土器に関する情報の積極的受容があったと考えられている（溝口 1988，堀 2004）。

30）小松市千代能美遺跡（石川県埋文調査）や能登地域七尾市万行遺跡（七尾市教委調査）は大型建物など特殊な遺構や遺構配置が明らかになった，重要な中核的集落遺跡であり，正式な報告書の刊行を待って検討したい。

〈引用・参考文献〉

青木勘時 2003「大和における古墳出現前後の土器様相とその特質」『古墳出現期の土師器と実年代シンポジウム資料集』大阪府文化財センター pp.63-111

青木元邦 1996「長泉寺遺跡の庄内式併行期の土器について―越前における庄内式併行期の地域性について」『庄内式土器研究』ＸＩ庄内式土器研究会 pp.23-33

青木元邦・赤澤徳明 1994「古式土師器の変遷」『長泉寺遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財センター pp.165-176

赤塚次郎 1990「１　廻間式土器」「２　土器・土器群の形成」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター pp.50-117

1992「東海系のトレース―３・４世紀の伊勢湾岸地域」『古代文化』44巻６号 pp.35-49

1995「壷を加飾する」『考古学フォーラム』７　愛知考古学談話会 pp.13-26

1996「前方後方墳の定着―東海系文化の波及と葛藤」『考古学研究』43巻２号 pp.20-35

1997「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター pp.79-95

1999ａ「前方後方墳とのかかわり」『前方後円墳の出現』季刊考古学別冊８ pp.41-52

1999ｂ「三世紀への加重―古墳時代初頭の様式変動と共鳴―」『考古学フォーラム』11愛知考古学談話会 pp.44-57

2001「男王，卑弥呼と素より和せず―狗奴国はどこか」『三国志がみた倭人たち』 pp.255-270

石野博信 2001『邪馬台国の考古学』吉川弘文館

石川日出志 2000「南関東の弥生社会展開図式・再考」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』東京堂出版 pp.739-760

市村慎太郎 2003「畿内および一部周辺地域における北陸系土器」『庄内式土器研究27』庄内式土器研究 pp.31-110
2004「畿内の越系土器」『邪馬台国時代の越と大和』香芝市二上山博物館 pp.125-166
植田文雄 1994「湖東北域の近江系について」『庄内式土器研究Ⅵ』庄内式土器研究会 pp.1-24
1994「古墳時代土器論—近江の土師器，その変遷と画期—」『滋賀考古』第12号 pp.1-45
2001「出現期前方後方墳の検討」『みずほ第36号』大和弥生文化の会 pp.101-128
2002「古墳時代の黎明期における日本海勢力と近江」『往還する考古学』近江貝塚研究会 pp.115-131
2003「前期古墳の様相—近畿北部・北陸—」『日本考古学協会2002年度 橿原大会 研究発表資料集』 pp.285-294
2004『神郷亀塚古墳』能登川町埋蔵文化財センター
大谷晃二 1995「弥生墳丘墓における主体部上の祭祀の一形態」『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団 pp.73-79
大村直 1995「東国における古墳の出現」『展望考古学』考古学研究会40周年記念論集 pp.101-108
奥田尚 1998「砂礫から見た土器胎土分析の現況」『庄内式土器研究』ⅩⅤ庄内式土器研究会 pp.40-57
兼康保明 1990「近江地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社 pp.321-419
2001「前方後方墳の拡散」『第9回春日井シンポジウム』第9回春日井シンポジウム実行委員会 pp.113-122
唐川明史 1998「上町マンダラ2号墳出土土器の編年について」『上町マンダラ2号墳発掘調査報告書』中島町教育委員会 pp.14-18
川村浩司 2003『古墳出現期土器の研究』高志書院
木田清 1997「第6章古墳時代以前の集落第2節まとめと若干の考察」『加賀能美古墳群』寺井町教育委員会 pp.317-327
岸本一宏 2001「弥生時代の低地円丘墓について」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』創刊号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 pp.11-29
楠正勝 1996「弥生時代中期後葉から古墳時代前期前半の土器」『西念南新保遺跡Ⅳ』金沢市文化財紀要119 金沢市教育委員会 pp.391-427
久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』19 pp.62-143
黒坂英樹 2003「近江における古墳出現前後の様相について—古保利古墳群とその周辺地域を中心として—」『古墳出現期の土師器と実年代シンポジウム資料集』大阪府文化財センター pp.249-282
小池香津江 2003「前期古墳における土器祭祀の成立と展開—大和の事例から」『続文化財論集』第1分冊 水野正好先生古稀記念論文集 pp.329-338
2003『古墳出土土器が語るもの—オオヤマトの前期古墳資料展』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館特別陳列図録第4冊
小嶋芳孝 1983「埴輪以前の古墳祭祀」『北陸の考古学』石川県考古学研究会 pp.381-422
小竹森直子 1988「近江の地域色の再検討—弥生時代後期～古墳時代初頭における高坏形土器・器台形土器の実態」『紀要第1号』財団法人滋賀県文化財保護協会 pp.13-27
1989「近江の地域色の再検討2 —周辺地域における近江系土器について—」『紀要第2号』財団法人滋賀県文化財保護協会 pp.1-15
1991「近江の地域色と外来系土器について～東海系土器を中心として～」『東海系土器の移動からみた東日本の後期弥生土器』第8回東海埋蔵文化財研究会浜松大会実行委員会 pp.77-87
小林正史 1994「民族考古学から見た土器の用途推定」『新視点 日本の歴史 第1巻原始編』新人物往来社 pp132-139

2000「カリンガ土器の変化過程」『交流の考古学』現代の考古学５　朝倉書店 pp.134-179
小西昌司 2002「出土土器の整理」『千田遺跡』金沢市埋蔵文化財センター pp.235-290
近藤広 1992「土器からみた湖南的要素と湖東的要素」『滋賀考古』第７号 pp.29-40
1994「受け口状口縁をもつ近江型土器の再検討」『滋賀考古』第12号 pp.65-71
2001「近江における邪馬台国時代前後の外来系土器」『シンポジウム邪馬台国時代の近江と大和資料集』香芝市二上山博物館 pp.42-70
佐々木憲一 2003「弥生から古墳へ―世界史のなかで」『古墳時代の日本列島』青木書店 pp.３-22
吹田直子 2003「山城における古墳時代初頭前後の土器様相」『古墳出現期の土師器と実年代シンポジウム資料集』大阪府文化財センター pp.283-305
高橋浩二 1995「北陸における古墳出現期の社会構造―土器の計量的分析と古墳から」『考古学雑誌第80巻第３号』日本考古学会 pp.１-40
2000「古墳出現期における越中の土器様相」『庄内式土器研究』ＸＸⅡ庄内式土器研究会 pp.21-41
高野陽子 2003ａ「北近畿における弥生時代後期から古墳時代前期の土器様式」『古墳出現期の土師器と年代シンポジウム資料集大阪府文化財センター pp.307-333
2003ｂ「弥生時代後期～古墳時代の土器様相」『佐山遺跡』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター pp.97-135
2004「庄内式甕の出現」『京都府埋蔵文化財情報』第92号 pp.９-22
田嶋明人 1986「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター pp.101-186
1991「２　土師器の編年　５北陸」『古墳時代の研究　６土師器と須恵器』雄山閣 pp.71-81
1993「混和剤からみた土器の生産と供給」『石川県埋蔵文化財保存協会年報４』石川県埋蔵文化財保存協会 pp.38-86
1995「古墳と“古墳時代”」『北陸古代土器研究第５号』北陸古代時研究会 pp.131-148
2004「３世紀の越系土器の移動」『邪馬台国時代の越と大和』香芝市二上山博物館 pp.63-73
田中勝弘 1997「弥生の墓から古墳へ―近江の場合の三つの墳形と墳墓群構造」『太迩波考古学論集』両丹考古学研究会 pp.81-95
次山淳 1993「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』第40巻第２号　考古学研究会 pp.47-71
2000「土器からみた諸変革」『国家形成過程の諸変革』考古学研究会例会委員会 pp.55-73
都出比呂志 1998「総論―弥生から古墳へ」『古代国家はこうして生まれた』
出越茂和 1999「金沢平野における南北地域差」『戸水ホコダ遺跡』金沢市文化財紀要150金沢市埋蔵文化財センター pp.168-171
寺沢薫 1986「畿内古式土師器の編年と二，三の問題」『矢部遺跡』奈良県教育委員会 pp.327-397
1987「布留０式土器拡散論」『考古学と地域社会』同志社大学考古学シリーズⅢ pp.179-200
2000「王権誕生」『日本の歴史』第02巻　講談社
土井一行 1994「近江における外来系土器の様相―庄内併行期を中心にして」『庄内式土器研究』Ⅵ庄内式土器研究会 pp.25-31
栃木英道 1983「器台形土器の形態の変遷について」『北陸の考古学』石川考古学研究会 pp.279-294
1991「石川県の土器編年と東海系土器」『東海系土器の移動からみた東日本の後期弥生土器』第８回東海埋蔵文化財研究会浜松大会実行委員会 pp.97-104 pp.557-611
1994「能登地域の庄内式併行期の土器群の変遷」『庄内式土器研究』Ⅳ庄内式土器研究会 pp.69-83
豊岡卓之 1999「『纏向』土器資料の基礎的研究」『纏向遺跡の研究』奈良県立橿原考古学研究所・付属博物館 pp.71-133
豊島直博 2004「弥生時代における鉄剣の流通と把の地域性」『考古学雑誌』第88巻第２号 pp.１-37

中井正幸 1994「美濃における庄内式併行期の土器様相—西美濃を中心に—」『庄内式土器研究』Ⅵ庄内式土器研究会 pp.67-81

中谷正和・田中幸生 2003「越中における古墳出現前後の地域別土器編年—甕形土器を中心に—」『蜃気楼』秋山進午先生古稀記念論集刊行会 pp.193-224

中屋克彦 1994「加賀における近江系について」『庄内式土器研究』Ⅵ庄内式土器研究会 pp.96-108

1997「加賀・能登の庄内期の古墳出土土器について」『庄内式土器研究』ⅩⅢ庄内式土器研究会 pp.15-29

野々口陽子 1996「いわゆる畿内系二重口縁壺の展開」『京都府埋蔵文化財論集』第3集 京都府埋蔵文化財調査研究センター pp.225-242

橋本輝彦 1997「纏向遺跡の発生期古墳出土の土器について」『庄内式土器研究』ⅩⅣ pp.102-113

2000「纏向遺跡の初期古墳」伊達宗泰編『古代「おおやまと」を探る』学生社 pp.100-118

2004「大和と越の発生期古墳」『邪馬台国時代の越と大和』香芝市二上山博物館 pp.115-123

林大智 2002「鍛冶関連資料について」『小松市一針B遺跡・一針C遺跡』(財) 石川県埋蔵文化財センター pp.98-105

原田幹 1992「北陸における東海系土器の動向—古墳時代初頭前後の一様相」『石川県考古学研究会会誌』第35号石川県考古学研究会 pp.1-18

1995a「上荒屋遺跡出土の「東海系」土器について」『上荒屋遺跡』第2分冊 金沢市教育委員会 pp.280-289

1995b「東海系小型高坏考」『考古学フォーラム』7愛知考古学談話会pp1-11

1998「東海出土の北陸系土器」『考古学フォーラム』10愛知考古学談話会 pp.2-13

2002「中部地方の土器」『考古資料大観』第2巻 小学館

伴野幸一 2003「滋賀県野洲川流域の遺跡群と受口状口縁甕の変遷—近江における古墳出現期の土器と年代」『古墳出現期の土師器と実年代シンポジウム資料集』大阪府文化財センター pp.113-122

比田井克人 2001『関東における古墳出現期の変革』雄山閣

2004『古墳出現期の土器交流とその原理』雄山閣

古川登 1991「北部近江における「く」の字状口縁台付甕について—研究の提言—」『考古学フォーラム』2 pp.45-58

1995「「く」の字状口縁台付甕再論」『庄内式土器研究』Ⅹ pp.37-49

2003「北陸地方における古墳の出現」『風巻神山古墳群』清水町教育委員会 pp.59-71

古屋紀之 2004「北陸における古墳出現前後の墳墓の変遷—東西墳墓の土器配置系譜整理の一環として」『駿台史学』第120号 pp.107-136

福永伸哉 1999「近畿地方の出現期の古墳」『前方後円墳の出現』季刊考古学別冊8 pp.10-27

北条芳隆 2000「前方後円墳と倭王権」『古墳時代像を見なおす—成立過程と社会変革』青木書店 pp.77-135

堀大介 2001「東海系土器の受容とその地域性」『第9回春日井シンポジウム』第9回春日井シンポジウム実行委員会 pp.171-180

2002「古墳成立期の土器編年—北陸南西部を中心に—」『朝日山』朝日町教育委員会附編 pp.1-114

2003a「月影式の成立と終焉」『古墳出現期の土師器と実年代シンポジウム資料集』大阪府文化財センター pp.127-146

2003b「風巻式の時代」『庄内式土器研究ⅩⅩⅥ』庄内式土器研究会 pp.79-108

2004「3世紀の越の外来系土器」『邪馬台国時代の越と大和』香芝市二上山博物館pp.173-202

前田清彦 1993「越前，加賀における墳墓，古墳」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会 pp.125-127

1997「前方後方墳造営の背景」『加賀能美古墳群』寺井町教育委員会 pp.331-354
松室孝樹 1998「鴨田遺跡（M区）SR－1出土土器について」『室遺跡　宮司遺跡Ⅰ　鴨田遺跡Ⅴ』滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 pp.28-72
2002「近江における土器の変革―弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて―」『共に一女子を立て―卑弥呼政権の成立』滋賀県立安土城考古博物館 pp.82-85
溝口孝司 1988「古墳出現前後の土器相―筑前地方を素材として―」『考古学研究』35-2 pp.90-117
宮崎幹也 1994「北近江の土器様相」『庄内式土器研究Ⅵ』庄内式土器研究会 pp.45-66
宮本哲郎 1985「小型高坏の一考察―北加賀における小型高坏の出現と変移についての基礎的考察」『石川考古学研究会会誌』第28号 pp.93-108
1986「台付装飾壺の系譜―北加賀の資料を中心とした基礎的考察」『石川考古学研究会会誌』第29号 pp.43-68
南久和 1987「月影式土器小考」『金沢市押野西遺跡』金沢市教育委員会
1995「月影式土器小考　その2」『金沢市額新町遺跡』金沢市教育委員会 pp.64-90
村上恭之 2000「鉄器生産・流通と社会変革―古墳時代の開始をめぐる諸前提」『古墳時代像を見なおす―成立過程と社会変革』青木書店 pp.137-200
森岡秀人 2001「3世紀の近江と大和―交流の変化とその背景についての見通し―」『シンポジウム邪馬台国時代の近江と大和資料集』香芝市二上山博物館 pp.101-125
安英樹 1993「北陸の有文高坏について」『松任市浜相川・相川新遺跡』石川県立埋蔵文化財センター pp.41-48
1995「南加賀の月影式土器に関する小論―梯川中流域右岸地域の土器胎土と甕形態について」『寺井町千代デジロA遺跡・大長野A遺跡』石川県立埋蔵文化財センター pp.77-96
1994「北加賀地域の庄内式併行期の土器群の変遷」『庄内式土器研究』XⅣ庄内式土器研究会 pp.118-133
1997「北陸における土器交流拠点」『庄内式土器研究』XX庄内式土器研究会 pp.23-42
2003a「漆町編年・その光と影と」『蜃気楼』秋山進午先生古稀記念論集刊行会 pp.153-192
2003b「能登形カメと千種形カメ」『庄内式土器研究27』庄内式土器研究 pp.1-14
谷内尾晋司 1983「北加賀における古墳時代出現期の土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会 pp.295-332
吉岡康暢 1991『日本海域の土器・陶磁器』六興出版
吉田秀則 1990「滋賀県下の方形周溝墓の“供献土器”について」『紀要』第3号　（財）滋賀県文化財保護協会 pp.20-33
米田敏行 1997「庄内式土器研究の課題と展望」『庄内式土器研究XⅣ』庄内式土器研究会 pp.1-48
若林邦彦 2003「中河内地域における古式土師器変化の定点観測～久宝寺遺跡とその周辺を中心として～」『古墳出現期の土師器と実年代シンポジウム資料集』大阪府文化財センター pp.335-353

〈報告書・資料紹介（各県50音順）〉

〈石川県〉

旭遺跡群（一塚地区・旭小学校・宮永地区）：松任市教育委員会 1995『旭遺跡群』
（旭小学校）松任市教育委員会 1990『松任市旭小学校遺跡』
（一塚イチノツカ）石川県立埋蔵文化財センター 1991『松任市一塚イチノツカ遺跡』
荒木田　石川県立埋蔵文化財センター 1995『荒木田遺跡』
畝田　石川県立埋蔵文化財センター 1991『畝田遺跡』
畝田・寺中　金沢市教育委員会 1984『金沢市畝田・寺中遺跡』

漆町　石川県立埋蔵文化財センター 1986『漆町遺跡Ⅰ』
石川県立埋蔵文化財センター 1988『漆町遺跡Ⅱ』
石川県立埋蔵文化財センター 1989『漆町遺跡Ⅲ』
大友西　金沢市埋蔵文化財センター 2002『大友西遺跡Ⅱ』
押野西　金沢市教育委員会 1987『金沢市押野西遺跡』
御経塚シンデン　野々市町教育委員会 2001『御経塚シンデン遺跡　御経塚シンデン古墳群』
御経塚ツカダ　野々市町教育委員会 1984『御経塚ツカダ遺跡（御経塚Ｂ遺跡）発掘調査報告書Ⅰ』
片山津　加賀市教育委員会 1963『加賀片山津玉造り遺跡の研究』
上荒屋　金沢市教育委員会 1995『金沢市上荒屋遺跡Ⅰ』
上新庄ニシウラ　野々市町教育委員会 1998『上新庄ニシウラ遺跡』
神谷内古墳群　金沢市埋蔵文化財センター 2004『神谷内古墳群Ｃ支群』
北安江　石川県立埋蔵文化財センター 1985『金沢市北安江遺跡』
倉部出戸　石川県立埋蔵文化財センター 1992『倉部』
小菅波４号墳　日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993『東日本における古墳出現過程の再検討』
古府クルビ　石川県教育委員会 1976『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ』
南久和 1984「金沢市古府クルビ遺跡出土土器に認められる代謝現象について」『金沢市畝田・寺中遺跡』金沢市教育委員会
西念・南新保　金沢市教育委員会 1983『金沢市西念・南新保遺跡』
金沢市教育委員会 1989『金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ』
金沢市教育委員会 1992『金沢市西念・南新保遺跡Ⅲ』
金沢市教育委員会 1996『金沢市西念・南新保遺跡Ⅳ』
下安原　金沢市教育委員会 1990『金沢市下安原遺跡』
寺中Ｂ　石川県立埋蔵文化財センター 1991『金沢市寺中Ｂ遺跡』
白江梯川　石川県立埋蔵文化財センター 1988『白江梯川遺跡Ⅰ』
新保本町西　金沢市教育委員会 1992『新保本町西遺跡Ⅲ』
金沢市教育委員会 1985『金沢市新保本町東遺跡・西遺跡・金沢市近岡カンタンボ遺跡』
新保本町東　金沢市教育委員会 1991『金沢市新保本町東』
千田　金沢市埋蔵文化財センター 2002『千田遺跡』
千代　石川県立埋蔵文化財センター 1992『千代』
千代・能美　小松市教育委員会 2001『千代・能美遺跡』』
相川新　石川県立埋蔵文化財センター 1993『相川新遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター 1993『松任市浜相川・相川新遺跡』
松任市教育委員会 1998『松任市相川新遺跡』
竹松　石川県立埋蔵文化財センター 1992『松任市竹松遺跡群』
松任市教育委員会 1997『松任市竹松遺跡』
近岡　石川県立埋蔵文化財センター 1986『近岡遺跡』
近岡ナカシマ　金沢市教育委員会 1986『金沢市近岡ナカシマ遺跡』
戸水Ｃ　石川県立埋蔵文化財センター 1993『石川県金沢市戸水Ｃ遺跡平成２・３年度発掘調査報告書』
（財）石川県埋蔵文化財センター 2000『金沢市戸水Ｃ遺跡・戸水Ｃ古墳群（第９・10次）』
戸水ホコダ　金沢市埋蔵文化財センター 1999『戸水遺跡群Ⅰ　戸水ホコダ遺跡』』
永町ガマノマガリ　石川県立埋蔵文化財センター 1988『永町ガマノマガリ遺跡』
額見町西　（財）石川県埋蔵文化財センター 2000『小松市額見町西遺跡』
猫橋　加賀市教育委員会 1993『猫橋遺跡』
（財）石川県埋蔵文化財センター 2002『加賀市猫橋遺跡』

額新町　金沢市教育委員会 1995『金沢市額新町遺跡』
一針Ｂ　（財）石川県埋蔵文化財センター 2002『小松市一針Ｂ遺跡・一針Ｃ遺跡』
藤江Ｃ　石川県立埋蔵文化財センター 1997『金沢市藤江Ｃ遺跡Ⅱ』
（財）石川県埋蔵文化財センター 2000『金沢市藤江Ｃ遺跡Ⅲ』
（財）石川県埋蔵文化財センター 2002『金沢市藤江Ｃ遺跡Ⅳ・Ⅴ第２分冊弥生・古墳時代編』
（財）石川県埋蔵文化財センター 2000『金沢市藤江Ｃ遺跡Ⅵ』
（財）石川県埋蔵文化財センター 2002『金沢市藤江Ｃ遺跡Ⅶ』
二口六丁　金沢市教育委員会 1983『金沢市二口六丁遺跡』
二子塚　石川県教育委員会 1974『加賀市二子塚遺跡発掘調査概報』
分校カン山　加賀市教育委員会 1979『分校古墳群発掘調査報告』
松寺　金沢市教育委員会 1985『金沢市松寺遺跡』
金沢市教育委員会 1992『田中Ａ遺跡』
金沢市教育委員会 1997『金沢市松寺遺跡（その２）』
南新保三枚田　金沢市教育委員会 1984『金沢市南新保三枚田遺跡』
南新保Ｃ　（財）石川県埋蔵文化財センター 2002『金沢市南新保Ｃ遺跡』
南新保Ｄ　金沢市教育委員会 1981『金沢市南新保Ｄ遺跡』
金沢市教育委員会 1995『南新保Ｄ遺跡２』
南新保Ｅ　（財）石川県埋蔵文化財センター『金沢市南新保Ｅ遺跡』
宮永坊の森　石川県立埋蔵文化財センター 1989『松任市宮永坊の森遺跡』
矢木ジワリ・ヒガシウラ　金沢市教育委員会 1987『金沢市矢木ジワリ遺跡　金沢市矢木ヒガシウラ遺跡』
八幡　（社）石川県埋蔵文化財保存協会 1998『石川県小松市八幡遺跡Ⅰ』
横江古屋敷　松任市教育委員会 1995『松任市横江古屋敷遺跡Ⅱ』
〈福井県〉
伊井　金津町教育委員会 1995『金津町埋蔵文化財調査概要　平成元年度～五年度』
今市　福井市教育委員会 1996『今市遺跡』
岩内山古墳群　岩内山遺跡調査団 1976『岩内山遺跡』
太田山古墳群　福井市教育委員会 1975『太田山古墳群』
小羽山古墳群　清水町教育委員会 2002『小羽山古墳群』
風巻神山古墳群　清水町教育委員会 2003『風巻神山古墳群』
上莇田　福井県教育庁埋蔵文化財センター 1986『六条・和田地区遺跡群』
福井県 1986『福井県史　資料編13　考古』
福井市 1990『福井市史　資料編１　考古』
口背子　福井県 1986『福井県史　資料編13　考古』
見田京　今立町教育委員会 1988『見田京遺跡』
光源寺　福井県教育庁埋蔵文化財センター 1994『光源寺遺跡』
甑谷　清水町教育委員会2002『甑谷』
下糸生脇　福井県教育庁埋蔵文化財センター 1999『下糸生脇遺跡』
下黒谷　福井県教育庁埋蔵文化財センター 1998『下黒谷遺跡』
松明山古墳群　福井県 1986『福井県史　資料編13　考古』
長泉寺　福井県教育庁埋蔵文化財センター 1994『長泉寺遺跡』
長泉寺山古墳群　鯖江市教育委員会 1967『王山・長泉寺山古墳群』
戸板山古墳群　今立町教育委員会 1986『戸板山古墳群』
今立町教育委員会 1997『戸板山古墳群Ⅱ』
中角　福井県教育庁埋蔵文化財センター 2002『中角遺跡現地説明会資料』

西谷　三国町教育委員会 1979『西谷遺跡』
魚谷鎮弘 1986「福井県における月影式土器について」『シンポジウム「月影式」土器について』石川県考古学研究会
花野谷１号墳　福井市教育委員会 2000『花野谷古墳現地説明会資料』
三尾野古墳群　福井市教育委員会 1993『福井市三尾野古墳群発掘調査報告書』
〈滋賀県〉
浅小井　滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1986「浅小井（高木）遺跡」『県営干拓地等農地整備事業関係発掘調査報告書Ⅲ』
石田　能登川町教育委員会 1995「林・石田遺跡」『能登川町埋蔵文化財調査報告書第36集』
能登川町教育委員会 2000「石田遺跡（第６次）」『能登川町埋蔵文化財調査報告書第49集』
能登川町教育委員会 2001「石田遺跡（第４次）」『能登川町埋蔵文化財調査報告書第50集』
石田三宅　滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1992『石田三宅遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
市　滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 2003『市遺跡』
入江内湖西野　滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1977『矢倉川中小河川改修工事に伴う入江内湖西野遺跡発掘調査報告書』
皇子山古墳群　埋蔵文化財研究会 1989「皇子山１号墳」「皇子山２号墳」『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第25回埋蔵文化財研究集会
大戌亥　古川登 1991
長浜市教育委員会 1997「大戌亥遺跡」『長浜市埋蔵文化財資料第18集』
大辰巳・永久寺　滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1985『県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ－３』
滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1985「長浜市永久寺遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告ＸⅡ－７』
大塚　長浜市教育委員会 1995「大塚遺跡」『長浜市埋蔵文化財資料第12集』
大森　高月町教育委員会 1986「大森遺跡」『高月町埋蔵文化財発掘調査報告書第１集』
小川　滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1980「神崎郡能登川町小川・宮の前・庄地遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅶ－５』
垣見北　能登川町教育委員会 1991「垣見北遺跡（第２次）」『能登川町埋蔵文化財調査報告書第20集』
柿田　滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1989『柿田遺跡発掘調査報告書』
鴨田　滋賀県教育委員会 1973『国道８号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書Ⅱ』
滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1994『長浜新川中小河川改修工事に伴う鴨田遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1998『室遺跡　宮司遺跡Ⅰ　鴨田遺跡Ⅴ』
長浜市教育委員会 2002『大戌亥遺跡・鴨田遺跡』
観学院ＳＸ５　埋蔵文化財研究会 1989「観学院遺跡ＳＸ５」『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第25回埋蔵文化財研究集会
木曽　滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1996「木曽遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書ＸＸⅢ－２』
滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1999「木曽遺跡Ⅲ」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書26－１』
北大津　中西常雄 1979『北大津の変貌』
北郷里小　滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1995『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書ＸＸⅡ－２堀部遺跡　堀部西・丸岡塚遺跡　南小足遺跡　上郷里小遺跡　岩町塚遺跡』
滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1996「北郷里小遺跡　上寺地遺跡」『県営かん

がい排水事業関連遺跡発掘調査報告書ＸⅡ－１』
滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1997『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書ＸＸⅣ－１上寺地遺跡　上郷里小遺跡　法性寺遺跡　墓立遺跡』
国友　滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1988「長浜市森前遺跡・国友遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』ＸＶ－１
滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1991『県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅶ－１　国友遺跡』
黒田　近江町教育委員会 1994『黒田遺跡３』
越前塚　長浜市教育委員会 1988「越前塚遺跡発掘調査報告書」『長浜市埋蔵文化財資料第５集』
小中　(財) 滋賀県文化財保護協会 1996「慈恩寺遺跡ほか」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書ＸＸⅢ－７』
五之里　滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1978『昭和五十一年度滋賀県文化財調査年報』
小松古墳　高月町教育委員会 2001『古保利古墳群　第１次確認調査報告書』
五村　虎姫町教育委員会 1992『虎姫町五村遺跡発掘調査報告書』
虎姫町教育委員会 1997『五村遺跡』
金剛寺　滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1987「長浜市金剛寺遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』ＸⅣ
金剛寺・後川　滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1990『金剛寺・後川遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
蔵之町　五箇荘町教育委員会 1986「五箇荘町蔵ノ町遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』
西円寺古墳　近江町教育委員会 1993『近江町文化財調査報告書第16集　西円寺遺跡』
坂口　滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1984『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅸ―伊香郡余呉坂口遺跡』
桜内　滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1989『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書ＸＩ―伊香郡余呉桜内遺跡』
滋賀里　湖西線関係遺跡発掘調査団 1973『湖西線関係遺跡発掘調査報告書』
下長　守山市教育委員会 1993「下長遺跡発掘調査報告書Ⅲ」『守山市文化財調査報告書第50冊』
守山市教育委員会 1995「下長遺跡発掘調査報告書Ⅴ」『守山市文化財調査報告書第55冊』
十里町　長浜市教育委員会 1988「十里町遺跡第４次調査」『長浜市埋蔵文化財資料第４集』
正伝寺南　滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1990『一般国道161号線（高島バイパス）建設に伴う新旭町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ―正伝寺南遺跡―』
神郷亀塚　能登川町埋蔵文化財センター 2004『神郷亀塚古墳』
高田　滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1980『高田遺跡発掘調査報告書』
塚之越　(財) 滋賀県文化財保護協会 2001「守山市古高所在の前方後方形周溝墓について」『滋賀県文化財だより』№269
壷笠山古墳　埋蔵文化財研究会 1989「壷笠山古墳」『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第25回埋蔵文化財研究集会
出町　近江八幡市教育委員会 1985「出町遺跡」『近江八幡市埋蔵文化財調査報告書（Ⅶ)』
斗西　能登川町教育委員会 1988「斗西遺跡」『能登川町埋蔵文化財調査報告書第10集』
能登川町教育委員会 1993「斗西遺跡（２次調査)」『能登川町埋蔵文化財調査報告書第27集』
能登川町教育委員会 1993「斗西遺跡（３次調査)」『能登川町埋蔵文化財調査報告書第31集』
能登川町教育委員会 1999『能登川町埋蔵文化財調査報告書第44集』
冨波古墳　野洲町教育委員会 1983『冨波遺跡発掘調査概要報告書』
野洲町教育委員会 1992『冨波遺跡－Ⅱ　冨波遺跡発掘調査報告書』

中沢　能登川町教育委員会 1992「中沢遺跡（７次調査）」『能登川町埋蔵文化財調査報告書第24集』
西火打　滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 1987「西火打遺跡」『一般国道８号線（長浜バイパス）関連遺跡発掘調査報告書Ⅶ』
墓立　長浜市教育委員会 1995「墓立遺跡Ⅰ」『長浜市埋蔵文化財資料第10集』
長浜市教育委員会 1996「墓立遺跡Ⅱ」『長浜市埋蔵文化財資料第15集』
長浜市教育委員会 2004『川崎遺跡（1995年・1996年）墓立遺跡（1996年）』
播磨田東　（財）滋賀県文化財保護協会 2001「播磨田東遺跡出土土器の紹介」『滋賀文化財だより』№.268
針江　滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 1980「高島郡新旭町針江遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅶ１』
針江川北　滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 1993『一般国道161号線（高島バイパス）建設に伴う新旭町内遺跡発掘調査報告書Ⅴ―針江川北（Ⅱ）遺跡・吉武城遺跡―』
平ノ前　滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 2003『平ノ前遺跡・構遺跡』
法勝寺　滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 1988「法勝寺遺跡」『一般国道８号線（長浜バイパス）関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ―狐塚遺跡・法勝寺遺跡―』
滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 1990「法勝寺遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書ⅩⅦ－１』
近江町教育委員会 1990『近江町文化財調査報告書第６集　法勝寺遺跡』
堀部西　滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 1993『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書ⅩⅩ－９堀部西・丸岡塚遺跡，春近遺跡』
妙楽寺　滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 1989『妙楽寺遺跡Ⅲ』
簗瀬　五箇荘町教育委員会 1992『簗瀬遺跡』
雪野山古墳　八日市市教育委員会 1996『雪野山古墳の研究』
横江　滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 1987『横江遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
吉武城　滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 1993『一般国道161号線（高島バイパス）建設に伴う新旭町内遺跡発掘調査報告書Ⅴ―針江川北（Ⅱ）遺跡・吉武城遺跡―』
六条　滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 1990　『六条遺跡発掘調査報告書』
〈その他〉
弘法山　斉藤忠編 1978『弘法山古墳』
松本市教育委員会 1993『弘法山古墳出土遺物の再整理』
佐山　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2003『佐山遺跡』
芝ヶ原12号墳　城陽市教育委員会 1987『芝ヶ原古墳』
小路　（財）大阪府文化財センター 2004『小路遺跡（その３）』
象鼻山１号墳　養老町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1997『象鼻山１号墳―第１次発掘調査の成果』同 1998『象鼻山１号墳―第２次発掘調査の成果』　同 1999『象鼻山１号墳―第３次発掘調査の成果』
西上免　愛知県埋蔵文化財センター 1997『西上免遺跡』
廻間　愛知県埋蔵文化財センター 1990『廻間遺跡』
箸墓　白石太一郎ほか 1984「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第３集
奈良県立橿原考古学研究所 2002『箸墓古墳周辺の調査』　ほか
八王子　愛知県埋蔵文化財センター 2002『八王子遺跡』
深江北町　兵庫県教育委員会 1988『深江北町遺跡』
ホケノ山　奈良県立橿原考古学研究所 2001『ホケノ山古墳調査概報』　ほか
纏向　石野博文・関川尚功 1976『纏向』桜井市教育委員会
奈良県立橿原考古学研究所・付属博物館 1999『纏向遺跡の研究』　ほか

〈図の出典（各遺跡発掘調査報告書等より採図）〉

図２〈６・７：御経塚ツカダ　19・22：畝田SD05　23：西念南新保O区SD05　９：大友西　その他：千田〉　図３〈甕A：長泉寺SK18　甕B：畝田SD－５　甕C：漆町遺跡白江ネンブツドウSD26　甕C大型：上荒屋SD16　甕D：新保本町西SK15　甕E：荒木田④区SD16　甕F：近岡大溝中・下層　甕G：旭小学校SK５　壷A：長泉寺SK46　壷B：南新保D　P－54　壷C：藤江C　F区pit　壷D：藤江CⅡ河跡　壷E：上荒屋SD16下層　壷F：大友西　壷G：藤江C ST401　壷H：上荒屋SD16下層　器台A：大友西SE10　器台B：上荒田A溝　器台C：千田　高坏A：近岡ナカシマ２号溝　高坏B：上荒田A溝　高坏C：長泉寺SK46　鉢A：上荒屋SD16　（丸底）小型精製土器：上荒屋，千田〉　図４〈１：長泉寺SK18　２：藤江C ST401　３：大友西SE10　４：千田SK21　５：近岡ナカシマ２号溝　６：荒木田⑤区SX04　７：押野西A区集石　８：藤江CⅡ　９：永町ガマノマガリ第24号土坑　10：今市SD－５　11：長泉寺SK18〉　図５〈１：上荒屋SD16　２：近岡ナカシマ２号溝　３・４・８：寺中B　C区　５：藤江CⅡ河跡　６：松寺A１号溝　７：大友西　９：永町ガマノマガリ　10：長泉寺SK46　11：畝田SK334〉　図６〈１・２：南新保D　A区　３・６：長泉寺SK46　４・５：畝田SD－05　７：西念南新保P区SD06　８：光源寺〉　図７〈１・２：南新保C SH103　３：下安原103号土坑　４：畝田SD－05　５：上荒田A溝　６：西念南新保P区SD22　７：額新町ST01〉　図８〈１：南新保C SH103　２・５：畝田SK334　３：大友西SE10　４：大友西SK05　６：南新保D　P－11－１〉　図９〈１・２・５：正伝寺南土器群７　４：正伝寺南土器群５　３：石田４次SR－１　６：国友H３年度　７：斗西１次SD02－５　10：斗西２次SD01－９　８：柿田SH54　９：五村土坑１〉

図10〈１：桜内80 SB49　２：正伝寺南　土器群１　３：正伝寺南　土器群10　４：北郷里小T－15 SD07　５：桜内79 SB57　６・８：森浜　７：鴨田Ⅲ SD５　９：斗西３次SD01〉　図11〈１・２：正伝寺南土器群１　４：正伝寺南SD１　３：桜内85 SB４　５：石田１次SD－１　６・７：森浜　８：黒田SX01　９：妙楽寺SD220　10：国友H３年度〉　図12〈１・３・５：正伝寺南土器群７　４：正伝寺南SD－１　６：柿田SH04　７：鴨田Ⅲ SD－５　８：正伝寺南土器群10　９：桜内　10：北郷里小T－15 SD07　11：北郷里小SD303　12：森浜　13：鴨田M区SR－１　14：斗西１次SD02－７　15：黒田SX01　16：越前塚SX55　17：五村土坑１　18：垣見北SB－A１〉　図13〈１・８：桜内85 SB２　２・６：堀部西　落ち込み　３・５・９：正伝寺南土器群７　４・13：鴨田M区SR－１　７：正伝寺南土器群11　10：斗西１次SD02－７　11：木曽T６ SH８　12：墓立Ⅱ第３トレンチ第４号住居　14：斗西１次SD02－６　15：正伝寺南SK４　16：斗西３次SD01－２〉　図14〈１：正伝寺南土器群７　２：正伝寺南土器群10　３：正伝寺南土器群１　４：北郷里小T－15 SH04　５：北郷里小T－15 SD03　６・７：正伝寺南土器群７　８：正伝寺南土器群１　９：斗西３次SD12－４　10：六条土坑－１　11：六条第４トレンチ〉　図15〈小菅波４号墳〉　図16〈１：石田４次SR－１　２：正伝寺南　３：正伝寺南SD35　４：北郷里小T－15 SH４　５：斗西１次SD02－７　６：黒田SX01　７：斗西１次SD02－５　８：吉武城SD１　９：六条T－11 SD－１　10：森浜　11：六条T－13　12：国友H３年度　図17〈五村（虎姫町 1997）より構成〉　図18〈小松古墳（高月町 2001）より構成〉　図19〈芝ヶ原12号墳（城陽市 1987）より構成〉　図20〈小路（大阪府文化財センター 2004）より構成〉　図21〈廻間（愛知県埋文センター 1990）より構成〉　図22〈西上免（愛知県埋文 1997）より構成〉　図23〈旭遺跡群（松任市 1995）より構成〉